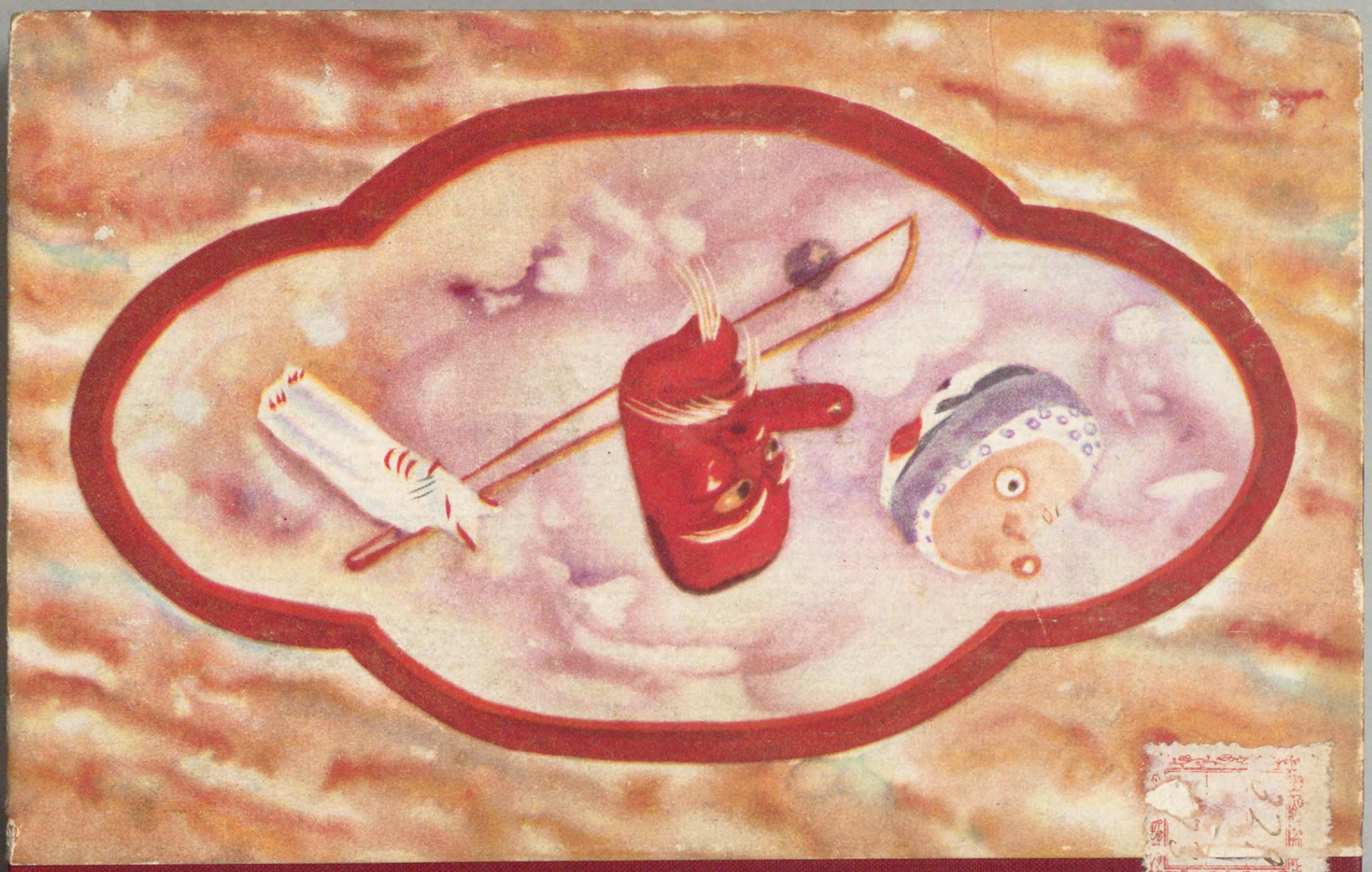
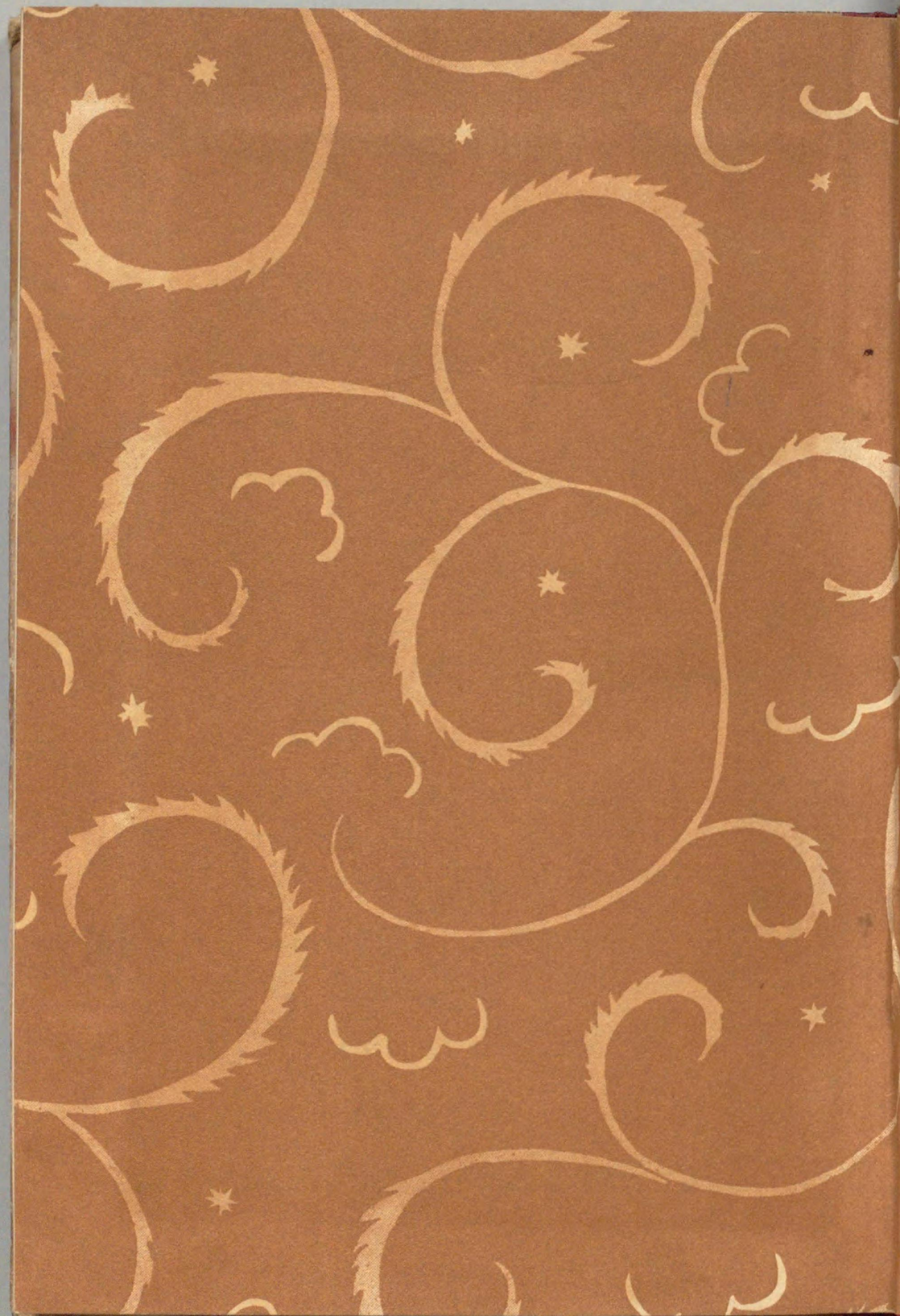




日本民藝文庫

日本昔話集

上

柳田國男 著

ARS

昭和五年
日本民藝館圖書

聽き耳頭巾

全集
N11

151155

はしがき

皆さん。この日本昔話集の中に、あなた方が前に一度、御聽きになつた話が幾つかあつても、それは少しも不思議なことではありません。なぜかといふと、日本昔話は、昔から代々の日本兒童が、常に聽いてゐた御話のことだからであります。

この昔話の大部分は、今でも日本のどこかの隅で、どこかの家の小さな人たちが、聽いてゐる話であります。けれども皆さんが一人で知つて御いでになる話は、さうたくさんはないだらうと思ひます。それは御話をする人が忙がしくなつて、もうさうはゆつくりと色々の話をしてゐられないからであります。だから若しこの本にある話の三分の一、四分の一だけでも、一人で知つてゐる兒童があつたとすれば、それは其子の家に、よつぽど話の好きな又上手な、さうして物覺えのよいお祖母さんかお祖父さん、又はお母さん姉さん

叔母さんなどの、子供の心持ちのよく解る人があつた爲で、さういふ御家は昔からさうたくさんにはありません。もう一度思ひ出してよく御禮をいふ方がいゝのです。

次にこの昔話集に書いてある昔話と、自分の覺えてゐる家の御話と、人の名や土地の名、道具や鳥獸、歌や言葉、又は事がらの後先などの違つてゐることがあつても、それも格別不思議なことではないのです。どちらか一方がうそだらうと思つたり、又は自分の記憶が誤まつてゐるように、思つたりするには及びません。昔話といふものは最初から、ほんの僅かな人で一しょに聽き、又其中でも一人か二人かゞ、それを後から生れて來る者に、話して聽かせることが出來たのであります。作りごとをする必要が少しもないと共に、知らずに間違へてゐても、それを直してくれる者はゐませんでした。永い年月の間には、村により又家庭によつて、少しづつ變つて來るのはあたりまへのことであります。同じ一つの御話でも、何度も何度も覺えたり思ひ出したりしてゐるうちには、自然に面白いと思ふところが動いて行くのです。さうしてその面白いところだけが、特別に詳しく話

されるやうになつて、他の殘りの部分がおひ〳〵に取れたり、落ちたり壞れたりするのであります。

私は日本の昔話を、この小さな一冊の本に集める爲に、少しでも變つた珍らしいものを探さうとはしませんでした。それよりも、なるだけ全國の多くの兒童が、聽いて知つてゐるだらうと思ふものを拾ひました。少なくとも日本國内の遠く離れた二箇所三箇所で、御互ひに知らずに話してゐるやうなのを、選んで見ようとしたのであります。たゞしさういふ幾つかある話の中では、殊に一番昔話らしいもの、卽ち古い形のちっとでも多く殘つてゐるものを採るやうにいたしました。それから新らしい形の最もよく整つたものを、四つか五つか其中に加へて置きました。これが日本の昔話の兩端であります。多分誰が見てもこの古いと新らしいとの區別は、すぐに分るであらうと思ひます。

何よりも私の愉快に思つたのは、日本全國の何億萬人といふ昔からの子供が、この同じ話を聽いて育つて來たといふことであります。それから今でもまだ其話を知つてゐる人

の少なくないといふことであります。それが此本を讀んでゐると段々にわかるのであります。又面白いことは、まるで同じかと思つてゐる話が、いつの間にか少しはちがつてゐるとこであります。どこがどう違ふかは讀んで見ればすぐに氣が付くでしよう。どうしてこんなに違つて來たか皆さんは大きくなつてから、もう一度考へて御覽なさい。

昭和五年二月

柳田國男

目次

猿の尾はなぜ短い……三
海月骨無し……四
雀と啄木鳥……六
鳩の孝行……八
時鳥兄弟……九
時鳥と百舌……一〇
梟染め屋……一二
蟬と大師樣……一三
鷦鷯も鷹仲間……一四

狸と田螺……一五
貉と猿と獺……一六
猿と猫と鼠……一八
猿と蟇との餅競爭……二一
猿聟入り……二三
山の神の靫……二六
鶯の卵……二九
弘濟和尙と海龜……三〇
猿正宗……三三
春の野路から……三六
黃金小臼……三九
はなたれ小僧樣……四二

松子の伊勢參り……四五
水蜘蛛……四七
泥鼈の親方……四八
やろか水……五〇
御辛勞の池……五一
米良の上漆……五二
蟹淵と安長姫……五五
龍宮の鐘……五七
山父のさとり……六〇
飯食はぬ女房……六一
牛方と山姥……六四
天道さん金ん綱……六八

鬼と神力坊……七一
金剛院と狐……七二
俄か入道……七五
小僧と狐……七六
片目の爺……七八
比治山の狐……七九
芝右衞門狸……八二
山伏の狸退治……八四
湊の杙……八六
狐が笑ふ……八八
夢を買うた三彌大盡……九〇
蛸島の虻……九一

だんぶり長者……九二
藁しべ長者……九五
炭燒小五郎……一〇二
二十騎が原……一〇五
長者の寶競べ……一〇七
會津の鶴塚……一〇八
湖山の池……一〇九
梅木屋敷……一一一
本取山……一一三
鶯姫……一一八
瓜子姫……一二〇
米囊粟囊……一二二

山姥の寶蓑……一二六
竈神の起り……一二九
矢村の彌助……一三三
狐女房……一三四
盲の水の神……一三五
爺に金……一三八
大歳の焚き火……一三九
笠地藏……一四〇
團子淨土……一四三
瘤二つ……一四六
奥州の灰まき爺……一四八
海の水はなぜ鹹い……一五三

八石山……一五七
犬頭絲……一五九
狐の恩返し……一六一
聽耳頭巾……一六三
雀の宮……一七〇
黑鯛大明神……一七一
蜥蜴の目貫……一七三
長崎の魚石……一七四
瓜の大事件……一七六
死後の占ひ……一七九
乞食の金……一八一
拾ひ過ぎ……一八四

山賊の弟……一八五
力士と産女……一九一
女の大力……一九四
大い子の握り飯……一九七
日田の鬼大夫……二〇〇
稲妻の大蔵……二〇二
藤抜き喜内……二〇三
阿波の大力熊野の大力……二〇四
仁王とが王……二〇五
旦九郎と田九郎……二〇七
分別八十八……二〇九
二反の白……二一一

無言くらべ……二一二
古屋の漏り……二一三
清蔵の兎……二一五
鳩の立ち聽ぎ……二一六
杖つき蟲……二一八
首筋の蒲團……二一八
知つたかぶり……二一九
やせ我慢……二二〇
慾ふか……二二一
物をしみ……二二二
盜み心……二二三
聟の世間話……二二三

下の國の屋根……三四
博奕の天登り……三四
空の旅……三四

日本昔話集 上

裝　幀・恩地孝四郎
口繪挿繪・岡　本　歸　一

猿の尾はなぜ短い

昔の昔の大昔、猿の尻尾は三十三尋あつたさうです。それが熊のために騙されて、あのやうな短い尻尾になつてしまひました。或時猿は熊のうちへ訪ねて行つて、どうすれば澤山の川の魚を、捕ることが出來るだらうかと相談しました。さうすると熊が言ふには、今晩のやうな寒い晩に、どこか深い淵の上の岩に坐つて、その尻尾を水の中へ漬けて置いてごらん。きっと色々な雜魚が來てくっつくからと敎へてくれました。猿は大喜びで敎へてもらつた通りにして待つてゐますと、夜が更けて行くうちに、段々と尻尾が重くなりました。それは氷が張つて來たのでしたが、お猿は雜魚が來てくっついたのだと思つてゐました。もう是くらゐ捕れたら十分だ。あんまり冷たいから還りましようと思つて、尻尾を引き上げようとしたけれどもなんとしても拔けません。これは大變だと大騷ぎをして、無理

に引張つたところが、其尻尾が根元からぷつつりと切れました。猿の顔の眞赤なのも、その時あまりに力を籠めて引張つた爲だと、言つてゐる人があります(出雲)。

海月骨無し

大昔、龍宮の王樣の御妃が御產の前になつて、猿の肝が食べて見たいといふ、珍らしい食好みをなされました。龍王はどうかして其望みをかなへて遣りたいものと、家來の龜を喚んで、何かよい考へはあるまいかと尋ねられました。龜は才覺のある者で、早速日本の島へ渡つて來て、ある海岸の山に遊んでゐる猿を見つけました。猿さん猿さん龍宮へ御客に行く氣は無いか、大きな山もあり御馳走はなんでもある。行くならば僕が負うて行つてあげると言つて、大きな背なかを出して見せました。猿はうつかりとこの龜の口車に乘つて、嬉しがつて龍宮見物に出かけました。成程かねて聞いてゐたよりも美しい御屋敷であ

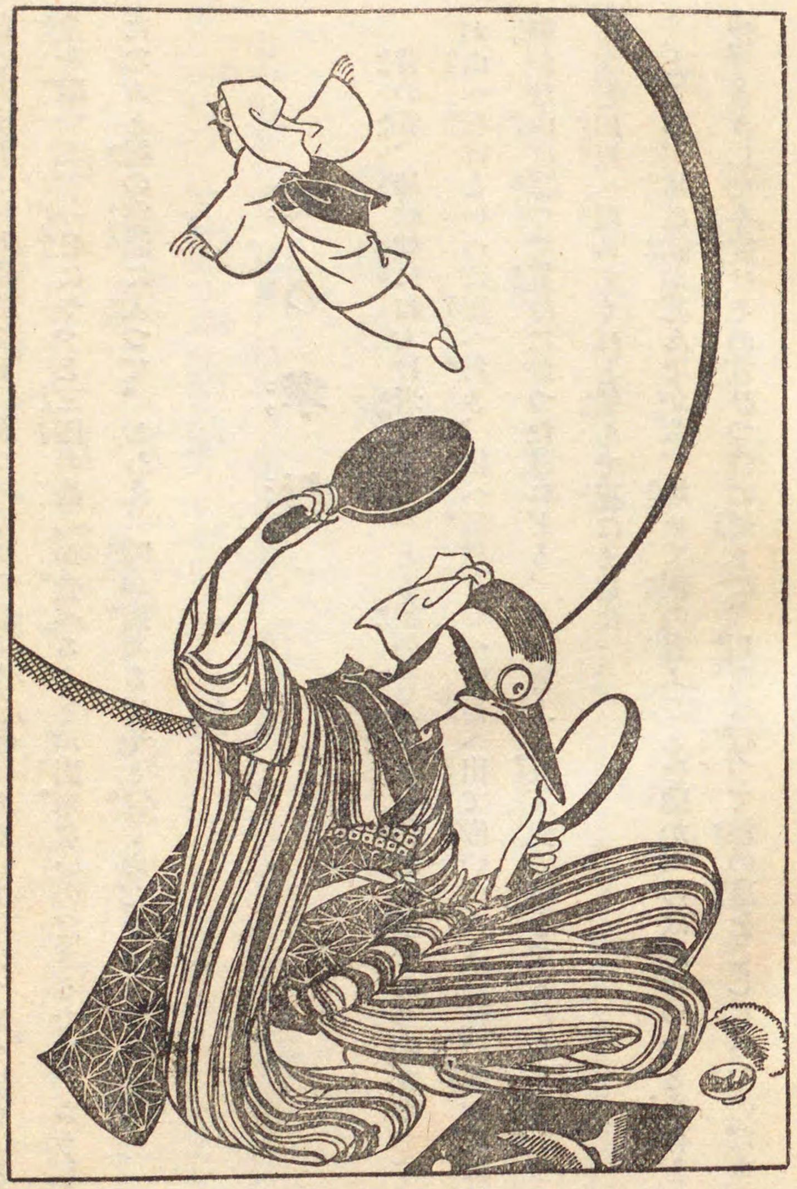
りました。中の御門の口に立つて、龜の案內してくれるのを待つてゐますと、門番の海月が猿の顏を見て笑ひました。猿さんはなんにも知らないな。龍王樣の御妃が御產の前で猿の肝が食べたいとおつしやるのだ。それで君が御客に呼ばれて來ることになつたのにといひました。こいつは大變だと思ひましたけれども、猿にも智惠があるので何食はぬ顏をしてゐますと、やがて龜が出て來てさあこちらへと言ひました。

龜さん僕は飛んでもないことをした。こんな御天氣模樣なら持つて來るのだつたが、うちの山の樹に肝を引掛けて、乾して置いて忘れて來た。雨が降り出したら濡れるだらうと思つて心配だと言ひました。なんだ君は肝を置いて出て來たのか、それぢやもう一度取りに行くより他はあるまいと、再び龜が背中に載せて、元の海岸まで戻つてまゐりました。さうすると猿は大急ぎて上陸して、一番高い樹の頂上に登つて、知らん顏をして方々を見てゐます。龜がびつくりして猿君どうしたといふと、海中に山無し、身を離れて肝無しと言つて笑ひました。是は龍宮で門口に待つてゐるうちに、あの口豆の海月がしやべつた

に相違ないと、龜は還つて來て龍王に訴へますと、けしからぬ奴といふことで、皮は剝がれる骨は皆拔かれる。とう〳〵今の海月の姿になつてしまつたのは、全くこのおしゃべりの罰だといふことであります。

雀と啄木鳥

昔の昔、雀と啄木鳥とは二人の姉妹であつたさうです。親が病氣でもういけないといふ知らせの來た時に、雀はちょうどお齒黑を附けかけてゐましたが、すぐに飛んで行つて看病をしました。それで今でも頰べたが汚れ、嘴も上の半分だけはまだ白いのであります。啄木鳥の方は紅をつけ白粉をつけ、ゆっくりおめかしをしてから出かけたので、終に大事な親の死目に逢ふことが出來ませんでした。だから雀は姿は美しくないけれども、いつも人間の住む所に住んで、人間の食べる穀物を、入用なだけ食べることが出來るのに、啄木



雀と啄木鳥

鳥は御化粧ばかり綺麗でも、朝は早くから森の中を驅けあるいて、がつか・むつかと木の皮を敲いて、一日にやつと三匹の蟲しか食べることが出來ないのださうです。さうして夜になると樹の空洞に入つて、おわえ、嘴が病めるでやと泣くのださうです(津輕)。

鳩の孝行

昔の昔、鳩は誠にねぢけ者で、ちつとも親の言ふことを聽かぬ子であつたさうです。親が山へ行けといへば田へ行き、田へ行けといへば畠へ出て働いてゐました。親が死ぬ時に靜かな山に葬つて貰ひたかつたけれども、さう言ふと又反對の事をするだらうと思つて、わざと川原へ埋めてくれと賴んで死にました。

ところが鳩は親が死んでから、始めて親の言ふことを聽かぬのは惡かつたと心付きました。さうして今度はその言ひつけの通りに、川原へ行つて親の墓をこしらへたのださうで

あります。然し川のふちでは、水が出るたびに墓が流れさうで氣がかりでたまりません。それ故に今でも雨が降りさうになると、この事を考へ出して悲しくなつて、ととつぽつぽ・親が戀しいといつて鳴くのださうであります。もう少し早くから、親のいふことを聽いてをればよかつたのであります(能登)。

時鳥の兄弟

むかしむかし、時鳥には大へん親切な善い弟があつたのださうです。毎年五月になると、山に行つて澤山の山の薯を掘つて來て、煮て一番おいしいところを兄さんに食べさせました。それを兄の方ではまだ疑つて、弟がもつと旨い山の薯を、自分では食べてゐるのだらうと思つて、しまひには憎んで庖丁を持つて來て、その優しい弟を殺したのださうです。さうして弟の腹を裂いて見ると、中からあわたといふ筋ばかり多い薯が出て來

ました。これは惡い事をしてしまつたと、後悔して悲しんでゐるうちに、とう〳〵この鳥になつてしまつたのださうです。だから今でも山の薯を掘る時節になると、鳴いて方々を飛びまはります。よく聽いてゐるとあの聲は、

おとゝ戀し
掘つて煮て食はそ
弟こひし
薯ほつて食はそ

と言つて啼くのだそうであります(越中)。

時鳥と百舌

むかし〳〵、時鳥は又沓を作る職人であつたといふ話もあります。百舌といふ鳥は其頃

は馬方であつたさうです。百舌の馬方は時鳥に賴んで、毎度馬の沓を打つてもらつて、ちっとも其代金を拂ひませんでした。それを覺えてゐていつ迄も、時鳥は沓の代はどうしたと鳴くのだそうです。さうすると百舌は面目無いものだから、時鳥の出て鳴く頃には、どこかへ隱れてゐて少しも顏を出しません。さうしていろ〳〵の小蟲を樹の小枝などに刺して置いて、時鳥の機嫌を取らうとするのださうです(紀州那賀郡)。

しかし又こんな話もありますから、どちらが本當だかよくは分りません。昔百舌は酒がすきで、時鳥の金を預かつて、御佛壇の佛樣を買つて來る約束をして置きながら、その金で酒を飲んでしまひました。それで時鳥が毎年其時になると、本尊掛けたかと鳴くのは、催促をするのだといふことであります。百舌はさう言はれると困るものだから、成るだけ默つて出て來ないやうにしてゐる。百舌の顏の赤いのは、御酒を飲んだからだと言ひますが、事によるときまりが惡いからかも知れません(同　有田郡)。

梟染め屋

むかし〳〵、梟は染物屋で、多くの鳥に頼まれて、色々の衣裳を染めてやるのが商賣であつたさうです。その頃烏は大へんなめかし屋で、いつも眞白い著物を著て飛びあるいてゐました。その烏が梟の染め屋へ來て、どうか私の衣裳を又とないやうな色に染めてくれと注文しました。梟はその注文を引き受けて、眞黑々の炭のやうな色に染め、是が世界に又とない色だと言ひました。烏は非常に腹を立てましたけれども、もうどうすることも出來ませんでした。それでも其怨みを忘れないで、梟の顏さへ見れば怒つていぢめます。それ故に梟は今でも森の奥に隱れて、烏の起きてゐる間は決して外へ出て來ぬのみならず、たまにゐる所を烏に見つかると、ひどい目に遭ふのであります(陸中岩手郡)。

蟬と大師樣

むかし弘法大師が乞食のやうなきたない衣を着て、諸國の田舍を巡つてをられた時に、ある村の百姓の家に來て、一夜の宿を貸してくれと頼まれました。百姓はあんまり大師の風體が惡いので、すげなく斷つて歸してしまひました。さうして後になつて、始めてそれが弘法大師だといふことに心付きました。それで大急ぎに欅の樹の上に登り、大きな聲で弘法樣よーい、弘法樣よーいと呼び立てましたけれども、もう遠くへ行かれたと見えて歸つて來られません。それをいつ途も一心になつて呼んでゐるうちに、とう〳〵其百姓はちばひめといふ蟬になつたのださうです。今でも七月の二十三日になると、欅の大木にこの蟬が集まつて高い聲で啼くのは、この日が大師樣の一夜の宿を借りに、まはつて來られた日だらうと言つてをりました(常陸)。

鷦鷯も鷹仲間

大昔色々の鷹が集まつて酒盛りをしてゐる所へ、小さな鷦鷯が遣つて來て、僕も仲間に入れて下さいと言つたさうです。鷹の同勢はこれをばかにして、この仲間に入りたければ猪を捕つて來るがいゝ。猪を捕つて來たら酒盛りに加へてやらうと言ひました。さうすると、鷦鷯は直ぐに飛んで行つて、藪の中に寢てゐる猪の耳の中に飛びこみました。猪はびっくりして驅け出しましたが、小さな鷦鷯が耳の中であばれるので、苦しくてたまらぬから夢中になつて狂ひまはり、とう〳〵岩の角に頭をぶっつけて死んでしまひました。それで大威張りで歸つて來て、鷹の仲間に入つて酒盛りをしたさうであります。この時に熊鷹といふ大きな鷹が、負けぬ氣になつて、飛び出して行つたところが、猪が二匹つれ立つて走つてゐました。それを一ぺんに二つ共捕らうと思つて、右と左との足を一匹

づつに掛けたら、猪が兩方へ遁げて行かうとした爲に、慾深の熊鷹の股が裂けてしまつたといふ話もあります(播磨)。

狸と田螺

むかし〳〵、狸が田螺を誘つて、二人で伊勢參りをしたさうです。旅行もおしまひの日になつて、田螺が狸に向つて言ひました。どうだ狸君、たゞかうしてあるいてゐてもつまらない。是から伊勢の大神宮樣まで、二人で驅けっくらをして見ようぢやないかと言ひました。狸も同意をして支度をしてゐますと、田螺はすばやく貝の蓋を開いて、狸の尾のさきにちゃんと食ひ付きました。だから少しも骨を折らずに、狸と同じだけに飛んで行くことが出來ました。いよ〳〵伊勢の御鳥居の傍まで到着しますと、狸はうれしいものだから太い尻尾を振りました。それが石垣の石にかちんとぶっつかつて、田螺の貝が半分壞れて、

田螺は土の上へ轉がり落ちました。ずるい田螺は見え坊な奴ですから、痛いのを我慢してかう言つたさうであります。おい狸君、遲いぢやないか。僕はさっきに爰へ着いて、今肩を脱いで休んでゐるところだぜ(紀州)。

貉と猿と獺

むかし〳〵、貉と猿と獺の三人がつれ立つて、彌彦詣りに出かけたことがあるさうです。其途中で三人は拾ひ物をしました。その拾ひ物は蓙が一枚、鹽が一叺と豆が一升とでありました。是をどういふ風に分配したらよいか。中々相談が纏まらなかつたそうです。其うちに貉は賢いからかう言ひました。猿さんはこの蓙を持つて、山の樹の上に登つてひろげて、方々を眺めたらいゝぢやないか。獺さんはこの鹽をどこか魚のゐそうな池へ持つて行つて撒いて、魚を浮かせて捕つたらいゝぢやないか。私は殘りの豆を貰つて食べよ

狸と田螺

うと言ひますと、他の二人はうっかりと賛成してしまひました。猿は喜んで樹の上へ蓙を持つて行つて、それを敷いて見物をしようとしますと、直ぐにすべつてしまつて、猿も木から落ちました。さうして足を挫いてしまひました。獺は池を見付けて一叺の鹽を打ち込み、其後から水の中に入つて見ますと、鹽水が眼にしみて眞赤に爛れてしまひました。これは飛んだ物を背負ひ込んだ。全體貉がずるいからいけないと、二人で苦情を言ひに貉のうちへ行きまして、其間に貉は一升の豆をちゃんと食べてしまつて、女房の貉と二人で豆の皮を毛の間へ挾んで呻る眞似をしてゐました。私たちも豆を食べたらおできが澤山出來て、苦しい〳〵と言ひました。猿と獺とは又だまされて、それぢゃ御互ひ樣だから、仕方がないと言つて歸つて行つたさうです(越後)。

猿と猫と鼠

昔々ある所に、爺と婆とがありました。婆は精出して木綿を織ると、それを爺が風呂敷に入れて、方々の町を賣りあるいてゐました。或日爺は木綿を賣りに出て、一人で山路を歸つて來ると、遙か向うの山の樹に大きな雌猿がゐるのを、獵師が鐵砲を持つて擊たうとしてをりました。雌猿は手を合せて、こらへてくれといふ樣子をして拜んでをりました。可愛さうな事をすると思つて留めに行きますと、思はず鐵砲がそれて、爺は肩先を打たれました。獵師は飛んだことをしたと思つて遁げてしまひました。さうすると何處からともなく多くの小猿が現れて、一しょう懸命に介抱をしてくれました。さうして猿の家へ連れて行つて、大そうな御馳走をしたさうです。婆が心配をしてゐるからもう還ると言ひますと、猿たちが御禮に寶物をくれました。是は猿の一文錢と謂つて、世にも大切な寶物ですが、命の親樣にさし上げます。是を祭つて置くと金持ちになります。

ほんとうにお猿が言つた通りでありました。家では婆が年の暮だといふのに、木綿も賣らずに爺が還つて來たので、散々に怒りましたけれども、猿の一文錢の御蔭で、僅かな間

に金持ちになりました。ところが近所によくない人があつて、急に爺婆が金持ちになつたわけを聞いて、知らぬ間に其寶物を盜んでしまひました。

爺と婆とはびつくりして、方々尋ねて見ましたがどうしても在りかが知れません。そこで家に飼つてゐる玉といふ猫を喚んで、玉よ、猿の一文錢を三日の内に探し出して來い。探して來てくれたら御褒美だ。探し出さなければ是だよと言つて、光る短刀を拔いて見せました。猫は是を聽いてすぐに飛び出して、一匹の鼠をつかまへて言つて聽かせました。

鼠よ、うちの爺樣の寶物がなくなつた。三日のうちに見付けて來い。見つけて來るならば助けて遣る。若し見付けないと尻尾まで食べてしまふよと言ひました。鼠は食べられると大變だから、三日の間近所の家々をまはつて、猿の一文錢を探しました。さうしてしまひに隣りの惡者の家の箪笥の中にあるのを見つけて、引き出しを嚙つてそれを取り出し、持つて來て玉に渡しました。玉は喜んで、それをくはへて爺樣に渡しました。爺も婆も猫の玉も鼠も共々に大喜びで、皆が皆いつ迄も繁昌しました。めでたし〳〵（因幡）。

猿と蟇との餅競走

昔ある所の山の中で、猿と蟇蛙が出逢つたさうであります。ちようど御正月も近くなつて、里ではそちこちに餅を搗く、威勢の好い杵の音がしてゐました。なんと蟇どんあの餅を一臼、取つて來て食べる工夫はあるまいかと猿が言ひました。そこで山の中で相談をきめて、二人はそろ〳〵と里に降りて行きました。最初には先づ猿が庄屋樣の背戸に來て隱れてゐると、後から蟇が忍んで來て、庭の泉水の中へ、どぶんと大きな音をさせて飛び込みました。餅を搗いてゐる若い人たちは其音を聞いて、是は大變だ。うちの坊ちやんが池へ落ちたやうだといつて、臼も餅もほつたらかして置いて、殘らず水の傍へ驅けて來ました。其隙に猿はうま〳〵と餅の臼を抱へて、山の上まで運んで來ました。蟇も其後からのそのそと戻つて來ました。

なんと蟇どん、御前と二人でこの餅を分けて食ふよりも、いっその事臼のまゝで爰から轉がして、早く追ひ付いた方がまるごと食ふことにしてはどうかと猿が言ひました。蟇蛙は足がのろいから損だとは思ひましたが、それでも承知をして一、二、三の掛け聲と共にごろ〳〵と餅の臼を谷底に突き落しました。足の達者な猿は直ぐに其後から飛んで降ります。蟇は足が遲いので仕方なしに、のたり〳〵と山を下つて行きますと、運の好いこともあつたもので、餅はいつの間にか臼の中から拔け出して、道のはたの萩の枝にだらりと引懸つてゐました。是は有り難しと早速その餅の傍に坐り込んで、蟇は一人で緩々〳〵と賞玩してゐました。さうすると、空臼を逐つかけてむだ足をした猿が、がっかりして又登つて來ました。蟇どん〳〵、こっちの方から先に食つてはどうかねと、見物をしてゐた猿が言ひました。なあにこりゃ俺の餅だ。俺が好きな方から食はうよと、蟇蛙は答へました(越後)。

猿聟入り

昔々ある村の爺が、一人で山畠に出て働いてゐました。畠が廣くてあんまり骨が折れるので、あゝあゝ猿でもよいから來て助けてくれるなら、三人ある娘の一人は嫁に遣るがなあと言ひました。さうすると猿が一匹ひょっくり出て來ました。せっせと畠爲事を手傳つてくれました。こいつは困つた約束をしたわいと思つて、家に歸つて來て三人の娘と相談をすると、姉も二番目の娘も、猿のお嫁には行かれませんと言つて怒りました。末の娘だけがやさしい女で、お父さんが約束をなさつたのなら、是非がないから私が行きましょう。嫁入りの支度には瓶を一つ、其中へ縫ひ針を澤山に入れて下さいと言ひました。さうすると次の日の朝は、猿がちゃんと、聟樣の著物を著て、約束の花嫁を迎へに來ました。嫁の荷物は瓶と縫ひ針、是を猿の聟が背中に負うて、仲よく話をしながら、猿の住む山へ行きま

した。山の麓には深い谷川が流れてゐて、細い一本橋が架つてゐました。其橋を渡らうとする時に、猿の聟様が話しかけました。男の子が生れたならなんといふ名を付けよう。猿どの、子だから猿澤と付けましよう。女の子が出來たらなんと名を付けよう。この谷には藤の花がきれいだからお藤と付けましよう。さう言つて渡つて行くうちに一本橋が細いので、ちよつと手がさはると猿の聟は川へ墮ちました。さうして縫ひ針を入れた瓶を背負つたままで、水に流されて行きました。其時に猿の聟が泣きながら、こんな歌を詠んだといふことで、今でも其文句が殘つてゐます(備中)。

猿澤や、猿澤や、
お藤の母が泣くぞかわいや。

山の神の鈴

山の神の靫

昔ある所に盲の琵琶法師がありました。琵琶箱を背なかに負うて一人で旅行をしてゐるうちに、路に踏み迷うて山の中で日が暮れてしまひました。仕方がないから大きな樹の蔭に琵琶箱を卸して、そこに一晩野宿をしようと思つて、其大木に向つてかう言ひました。

まうし山の神様、私は路に迷うて夜になりましたから、今晩だけこゝに泊めていたゞきます。就いては御聞き苦しくもござりましようが、旅の座頭の作法として、琵琶の一曲を御聽きに入れますと言つて、琵琶を取り出して平家物語の一節を語りました。

さうすると高い所から聲が聞えて、さてもゝ面白い。どうぞ今一曲語つて聽かせてくれと言ふ人があります。不思議には思ひながらも、又望みに任せて同じ平家の他の一節を語りました。是は大きに有り難かつた。定めて疲れたであらうといふ聲がしました。暫く

すると誰だか知らぬ足音があつて、御膳に色々の食べ物を載せたのを持つて出て、この盲人に勸めました。是にも重ねて驚きましたけれども、根が無邪氣な座頭であつた上に、腹もへつてゐたので十分に御馳走になり、樹に向つて厚く禮を述べて、其晩は寢てしまひました。

翌朝になると、一人の獵人が出て來ました。あなたを人里のある所まで、御案内申せと言ひつけられて來ました。この靫にしっかりとつかまつて、私の後に附いて御出でなさいと言つて、太い毛皮の筒のようなものを、盲の手に持たせました。琵琶法師は大喜びで身ごしらへをして、其靫のさきを一しょう懸命に握んで、段々と山を降りて來ますと、やがて谿川の水の音も高くなり、遠い所の犬雞の聲などが聞えて來て、村に近くなつたことが知れました。

其うちに里の子供等が、大勢山に入つて來る話聲が聞えたかと思ふと、其中の一人が不意に大きな聲を出して、あれ〳〵あそこを見ろ。あんな座頭の坊が狼の尻尾をつかまへ

て、山から降りて來るはとどなりました。この言葉を聽くや否や、今まで路案内をしてゐた獵人は、慌てゝ靱を引き放して、元の路へ走つて還りました。後で聞くとこの獵人かと思つてゐたのが、實は狼であつたのであります。

それから琵琶法師は草苅り男を賴んで、先づ其村の村長の家へ、連れて行つて貰ひました。さうして昨日からの話を詳しくいたしますと、村長は手を打つて、なるほどそれで始めてよくわかりました。昨晩は突然と私の家の小さな子供が、妙なことを言ひ出したのであります。俺はこの山の山の神だ。今夜は珍しい客人があるのだから、何か御馳走をこしらへて山へ持つて來て、大木の下に休息してゐる人にさし上げろ。もし遲くなるとこの子供の命を取つてしまふぞと言つてあばれるので、家中で心配をして、兎も角も急いで御膳をこしらへて、山へ持たせて出したのであります。それでは山の神樣の客人といふのはあなたでしたか。よつぽど琵琶が御上手だと見えますねと言つて、大層この盲法師を尊敬したといふことであります。

鷲の卵

昔ある村に年とつた百姓があつて、美しい一人の娘をもつてゐました。田植ゑの頃に苗代を見まはつてゐると、蛇が小さな蛙を追ひかけて、苗代を荒してをります。蛇よさう追ふな。おれの一人娘を御前にやるからと言ひますと、蛇は追ふのを止めておとなしく歸つて行きました。さうして其晩から、立派な若い聟が娘のところへ、夜遲く來て朝早く歸るやうになりました。それがどういふ人かよく分らぬので、爺は氣にかけてゐましたが、ある日家の前を一人の見たことのない易者が通つて行くので、それを喚び込んで、占ひをしてもらひました。其易者が言ふには、この娘はたゞの人間でない者を聟に取つて、人間でない者の子を持つてゐるから、近いうちに死ぬかも知れない。けれども助かる方法がたつた一つある。裏の山の大木の上に、鷲が巣をかけて今卵を三つ産んでゐる。あれを聟殿

に頼んで取つて來てもらつて、食べさせて見たらよからうと言ひました。そこで其晩に來た聟に鷲の卵が食べたいといふ話をしますと、快く承知をして取りに登つてくれましたが、其時はちやんと蛇の姿をしてゐたさうであります。さうして二つの卵を口にくはへて來て、三つ目を取りに昇つたときに、鷲の親はその大蛇をつゝいて殺してしまひました。爺は家に歸つて見ると、昨日の易者が又來てゐて、この話を聽いて、それではもう娘さんは助かつた。この後では三月三日の節供に、酒の中へ桃の花を浮かせて御飲ませなさい。さうすれば愈々丈夫になります。私はあなたに命を助けられた、少さな蛙の御恩返しと言つて、ぴょん〳〵とどこかへ飛んで行きました。それから以來は三月の三日に、人が桃の酒を飲むやうになつたのださうであります（肥前杵島郡）。

弘濟和尙と海龜

むかし備後國に、三谷寺といふ大きな御寺がありました。始めてこの寺を建てる時に、佛の像や御堂に塗る黃金がないので、弘濟和尙といふ僧が土地の人に頼まれて、數多の產物を船に積んで京都に登り、それを黃金と交易しました。其用も濟んで難波津、今の大阪の港に來まして、歸りの船に乘らうとしてゐますと、大きな海龜を四つ、濱の漁師たちが捕つて來て、殺さうとしてゐるのを見かけました。弘濟は深く憐みの心を起して、海人の者に金を遣つて其龜を買ひ取り、四つとも海へ放して遣りました。

それからいよ〳〵出帆をしまして、備前の骨島といふ島の沖まで還つて來ますと、日の暮れ方になつて海賊の船が現れました。最初にこちらの船へ飛び込んで、先づ二人の家來を捉へて海の中へ投げ込みました。次に弘濟和尙に向つて御前も海へ入れ。入らぬならば投げ込むぞと言ひました。色々と靜かに話をして見ても、惡者どもが承知をしてくれないので、仕方なしに自分で海に入りますと、海賊は金を積んである船を漕いで、何處かへ行つてしまひました。

弘濟和尙は海に入つて見ましたが、淺い所に岩のやうな物があつて、足が其上に立つて體が沈みませんでした。一晩中かうして立つてゐて、夜が明けてからよく見ますと、岩かと思つたのは大きな海龜の甲らであつて、いつの間にか備前備中の灘も過ぎ、故郷の備後國の濱近くまで來てゐましたさうです。村に戻つてこの不思議な命拾ひの話をしましたところが、一人として龜の恩返しの深き心ざしを、感心せぬ者はありませんでした。

それから暫くして後に、この村で大きな御寺が建つことを聞いて、黃金を持つて賣りに來た者がありました。弘濟和尙は早速出て見ますと、其黃金商人の群れの中に、先日の海賊が六人までまじつてをりました。海賊は和尙の顏を見まして、非常に驚き又畏れて、默つて下を向いて靑くなつてふるへてゐます。弘濟もそれをよく知つてゐましたけれども、一言も其事は言はずにたゞ黃金の價を出して交換してやりました。惡者どもは其代物を受け取つて、なんともかとも云はれぬやうな顏をして、默つて還つて行つたさうであります。

猿正宗

むかし九州の或大名の家の飛脚が二人、江戸へ御用の大切な手紙を持つて、東海道を旅行してをりました。興津の宿を朝のまだ暗いうちに立つて、薩埵峠といふ大きな阪路を海岸の方から登つて行かうとする所で、何心なく濱の方を見ますと、珍しく大きな章魚が一匹出てゐまして、あの足で何物かを搦めつけて、海の中へ引き込まうとしてゐます。よく見るとそれは猿でありました。猿は岩の角にしっかりと取り付いて、引き入れられまいと一しょう懸命に爭うてゐますが、章魚の方が力が强さうに見えました。助けてやらうぢやないかと、小石などを投げて嚇して見ました。けれども章魚は平氣で中々其手を放さうとしません。そこで二人とも荷物を峠口の路傍に置き、磯端に走つて行つて脇差しを拔いて章魚に切り掛けますと、漸くのことで搦んでゐた手を解いて、章魚は水の中へする〳〵

と入つて行きました。

ところが、其猿は危い一命を助かつて、如何にも嬉しさうに其場を飛び退いて、二人の恩人の側へ近よつて來る樣子でありましたが、どうした事か忽ち路の脇に置いてあつた御狀箱を擔いで、どし〳〵と山の上へ走つて遁げてしまひました。其箱の中には、何よりも大切な御用の手紙が入つてゐるのです。山には峠路より外に登つて行く路はありません。それを無理に押し分けて、心配しながら猿の後を追ひかけて見ましたけれども、もう何處へ行つたのやら、姿も影も見えませんでした。御狀箱がなくなつては、旅行を續けるわけにも行かず、是は飛んでもない事になつてしまつたと、兩人とも困り切つて、茫然として峠の中程に休んでをりました。

さうすると稍暫くしてから、遙かむかうの山に再び同じ猿の姿が現れました。あれ〳〵といつて見てゐますと、片手には何か長い薦包みのやうな物を抱へてゐます。不思議に思つてゐるうちに段々と二人の傍へ近よつて來まして、其二

品を前に置きました。先づ〳〵大切な御狀箱が、無事に戻つて來たのは大安心、今一つの方はなんであらうかと、手に取つて見ようとしますと、其猿は歸つて行きました。この品を御禮に持つて來ようと思つて、暫くの間兩人に待つてゐて貰ふ爲に、狀箱を隱したのであつたといふことが、初めて解つたのであります。

それで其薦包みがなんであつたかと開いて見ると、中には白木の棒鞘に入つて、一振りの刀がありました。それを江戸に着いてから後に、其道の人に鑑定して貰ひますと、紛れもない五郎正宗の名作であつたさうです。研ぎ立てゝ見れば一點の疵もなく、如何にも見事な古刀であつたので、是を殿樣に獻上することになりました。寸尺といひ形といひ、ちょうど其頃御望みであつた通りなので、二人の飛脚の者は手厚い御褒美を賜はり、其名刀は猿正宗と名づけられて、永く御家の寶物の中に加へられましたさうです。めでたし〳〵。

春の野路から

昔々ある所に、貧乏な一人の爺が住んでゐました。毎日々々働いてやっと暮しを立てゝゐました。今日は卯月の八日だから、一日だけ家でゆっくりと休まうと思つてゐますと、又用が出來て外へ行かなければならぬことになりました。折角買つて置いた一升の酒を、徳利のまゝでぶら下げて、途中でゞも飲まうと思つて一人で出かけました。晴々としたよい天氣で、野にも山にも色々の花が、咲きほこつてゐるのでありました。廣い野原にさしかゝつて、天氣は好し疲れもしたので、この邊で一杯やらうと思つて、よいくらゐの石に腰を掛けますと、足もとに一つの骸骨が轉がつてゐました。これは〳〵、どういふ人の骨だか知らないが、ちょうどよい所だ。俺は一人で飲むのはきらひだ。御前さんも一つ飲んで、この景色を見ながら一しょに樂しみましようといつて、盃になみ〳〵と一杯ついだ

酒を、その骸骨に濺ぎかけたさうです。さうして面白く歌などを歌つて、やゝ暫く遊んでから、そこを立つて出かけました。

ところがこの爺が用を濟ませて、その日の黄昏時に同じ野を通つて歸つて來ると、後から爺樣ちょっと待つてと呼ぶ聲がしました。振り返つて見ると十七八の、美しい姉樣であつたさうです。今日は御前さんの御蔭で、ほんとうに嬉しい思ひをしました。其御禮を言ひたい爲に、歸つて來られるのを待つてゐました。私は三年前のこの月の二十八日に、この野原を通つてゐて急病で死んだ娘でありました。親たちは今に諸處方々を探してゐますが、緣が薄くてまだ見つけてくれず、昨日までは誠に寂しく暮してゐました。二十八日の法事の日には、何用を置いても是非もう一度爰へ來て、私と一しょに親の家へ行つて下さいといつたさうです。

いよ〳〵その二十八日になつて、爺は約束だから朝のうちに野原に來て見ますと、美しい娘が出て待つてゐました。それから連れだつて野の隣の村に入つて行きました。娘の家

といふのは大きな構への屋敷で、村の人が大勢今日の法事の爲に寄り合つてをりました。俺にはとてもこの中へは入れないと爺がいふと、それなら私の著物に取り附いて入ればよいといつて、二人とも誰にも見付けられず、すると〳〵と家の中に入つて、佛壇の間に坐りました。座敷には本膳が出て御吸ひ物も酒もありました。好きな酒ですから娘が勸めるまに、爺樣は酒を飲み好きな肴を色々と取つて食べました。座敷にゐる坊樣や親類の客人は、知らぬうちに自分の膳の物も酒もなくなるので、不思議だ不思議だと話しあつてをりました。

其うちに御膳を下げる段になつて、一人の小さな女中が皿を落して缺きました。家の主人は大事の皿を飛んでもないことをしたと、ひどく小言をいひました。幽靈の娘はそれを見て、爺樣に向つてさゝやきました。私はあゝいふ所を見るのがいやだから、もう歸りますといひました。爺はそんなら俺も行くといふと、御前さんはまあいゝから爰にゐて下さいと言つて、獨りで何處かへ行つてしまひました。娘が出て行つてしまふと、直ぐに爺樣

の姿が皆に見えて來ました。御前は何者だ、どこから來たか、どうしてこの座敷へ來てゐたかと尋ねられました。もう隱すことは出來ないので、今までのことを殘らず話して聞かせますと、親類一同の者はびっくりし、主人夫婦は泣きました。それでは早速娘のゐる野原へ、私たちを案内して下さい。拜む賴むと言はれました。それで爺が先に立ち、親たち一族寺の和尙までが打ち揃うて、骨を迎へに行つて、もう一度葬式を營みました。爺樣も貧乏な手間取りなどを止めて、この家の人たちから情をかけられ、一生安樂に暮すことが出來たさうです(陸中上閉伊郡)。

黃金小臼

昔々、奥州、みぞろが沼の片ほとりに、兄弟の百姓が住んでゐました。兄は少し愚かで、弟は中々小ざかしい男でありました。それで其弟は兄を追ひ使つて、毎日々々沼

の岸へ遣つて、草苅りばかりさせて置きました。ところが或日のこと、沼から美しい女の人が、手に一通の手紙を持つて出て來まして、どうかこの手紙を御駒が嶽の麓にある八郎が沼まで持つて行つてくれと、其兄に頼みました。八郎が沼へ行つたら、岸に立つてたんたんと手を叩いておくれ。さうすれば水の中から若い女が出て來るから、それにこの狀を渡せばよいと言ひました。

男は頼まれてなんの疑ひもなく、早速その手紙を持つて八郎が沼へ行きました。さうして教へられた通りに手を叩くと、果して沼から美しい女が現れて、手紙を受け取つて讀みました。みぞろが沼の姉樣が、いつも御前の世話になるさうな。この手紙の中に書いてある品物は、今持つて來てあげるから暫く待つてゐるやうにと言つて、沼に戻つて小さな石の挽き臼を手に持つて、再び出て來ました。是は二つとないこの世の寶物だけれども、姉の言ひつけだから御前に進上する。この小臼に一粒の米を入れてまはすと、黄金の粒が一つ出ます。たゞ歸つたら庭の片隅に、小さくとも一つの池を掘つて、朝と晩にそれから水

を汲んで、この挽き臼に供へておくれ。かう言つて臼を男に手渡しして、又もとの沼へ入つて行きました。

兄は小臼を持つて自分の家に歸り、毎日一粒づつの黄金を臼から出して、樂々と暮すやうになりました。弟は兄が此頃草苅りにも行かず、樂に暮してゐるのを不審に思つて、そっと覗いて見ると妙な臼をまはしてゐます。それで兄の留守に遣つて來て、佛壇の隅から其小臼を見つけ出して、米粒を一つ入れてまはして見ると、忽ち黄金の粒が出るのでびっくりしました。しかし慾の深い弟ですから、それだけで濟まして置くことが出來ず、一度に澤山の金を取つて置かうと思つて、椀に一杯の米を打ち込んで其臼をまはして見ました。さうすると小臼はころ〳〵と轉がつて、段々に外へ出て、庭の隅に掘つた小池の中へころがり込んで、とう〳〵見えなくなつてしまつたといふことであります(陸中江刺郡)。

はなたれ小僧様

昔々、肥後國の眞弓の里といふ山奥の村に、一人の爺がありました。毎日山に入つて薪を伐つて、それを關の町へ持つて出て、幽かな暮しを立てゝゐました。或日どうしても其薪の賣れないことがあつて、町のまん中を流れてゐる川の橋を、何度となく渡つて町中をあるいて見ましたが、一人も薪を買ふ人がありません。しまひには草臥れてしまつて、其橋の中程に來て休みました。さうして其薪を一把づつ、橋の上から川の淵へ投げ込んで、龍神様を拜んで歸つて行かうとしました。

さうすると、不意に其淵の中から、今まで見たこともないやうな美しい若い女が出て來て、爺を呼び留めました。其女の腕には小さな本當に小さな子供を一人抱いてゐます。お前が正直で毎日よく働いて、けふも薪を持つて來てさし上げたことを、龍神様は大變に喜

んで御出でになる。其御褒美にこの子供を御預けになるから連れて行きなさい。この御子ははなたれ小僧様と謂つて、お前の願ふことはなんでも聽いて下さる。其代りは、毎日三度づつ、是非とも海老の膾をこしらへて、御供へ申さなければならぬと言つて、女は其子供を爺に渡して、再び水の底に歸つて行きました。

爺は大喜びで其はなたれ小僧様を抱いて、眞弓の里に戻つて來て、神棚の脇に小さな小僧様をすゑて、大切に育てました。米でも御小遣ひでもなんでもかでも欲しいと思ふ物があれば、この小僧様にちょっと頼むと、直ぐにふうんと鼻をかむような音をさせて、それを爺の目の前に出します。あんまりこの家はきたなくなりました。もっと大きくて新しい家を出して下さいといふと、家のやうな物までもたゞ一度の鼻の音で出て來ます。さうして思つてゐたやりも尙美しい立派な家でありました。倉や道具なども段々に出て、見ちがへるやうな大金持ちに、僅か一月ほどの間になつてしまひました。山へ薪を採りにはもう行くに及びません。爺の爲事は毎日町に出て行つて、膾にする海老を買うて來るだけにな

りました。

ところが段々に月日がたつと共に、其たつた一つの役目までが、少し面倒くさくなりました。さうしてしまひにははなたれ小僧樣を神棚から下して、爺はかういふことを言ひました。はなたれ小僧樣、私はもう貴方に何も御願ひすることはありませんから、どうか龍宮へ御歸り下さい。さうして龍神樣へよろしく御傳へ下さいと申しました。それを聽いて小僧樣は、默つて外へ出て行かれました。さうして暫くの間家の外で、すうつと鼻を啜る音をさせてゐましたが、そのうちに段々と家も倉も、其中に在つた物も一つづゝ消えてなくなつて、あとにはたゞ以前のあばら家ばかりが殘りました。是は大變だと急いではなたれ小僧樣を、引き留めようと思つて飛び出しましたが、もう何處にも其姿は見えなかつたさうであります(肥後玉名郡)。

松子の伊勢參り

むかし伊勢の大神宮樣へ、出羽の北秋田の獨鈷といふ村の者だと言つて、若い男と女とが二人連れで御參りをして來ました。女の名は松子と謂つて、田舍の人にしては珍らしく上品な美しい女でありました。この二人が旅費が足りなくなつて、大へんに困つてゐるのを、宿屋の主人が見て氣の毒に思ひまして、そんなら來年誰かお前樣方の村の衆が參宮なさる時に、ことづけて返して下さいと言つて、入用なだけの御金を貸して遣りました。ところが其次の年に、獨鈷の村の人が大勢で來ましたから、あの金は持つて來てくれたかと尋ねましたけれども、私たちの村には松子などといふそんな美しい人はをらぬ。是はどうしたわけであらうかと、客も亭主も驚いてしまひました。それからこの伊勢參宮の人が村に還つて來て、村の人たちにこの話をしますと、なるほど、それでやつと合點が行つた。

村の諏訪神社の森の高い松の木の上に、三年も前からあゝして白く見えてゐるのは、どうも伊勢の御稜ひのやうだと思つてゐた。それでは一つ下して見ようといつて、松の樹に登つてその白いものを取つて見ると、果してそれは神宮の御札でありました。そんなら確かにこの二本の松が、人の形になつて伊勢參りをしたのであつた。早速その借金を返すがよいと、村で金を集めて、直ぐに伊勢の宿屋へ送り屆けることにしたさうであります。さうして其二本の松の樹の一方が女で、名前が松子さんであつたことも、この時からわかつたのであります(羽後北秋田郡)。

水蜘蛛

むかし奥州の半田山の沼で、夏の頃に或人が釣りをしてゐますと、珍らしく其日は澤山の魚が釣れて、僅かな間に魚籠が一杯になりました。ひどく暑い日であつたので、其人は跣になつて足を沼の中に浸してゐましたが、何處から出たものか一匹の水蜘蛛が、水の上を走つて來て、その足の拇指に絲を引懸けて行つた。さうして間もなく又來ては同じ所に絲をかけるので、不思議に思つて其絲をそっと拇指からはづして、傍にあつた大きな楊の株に卷き付けて置きました。さうするとやがて沼の底で、次郎も太郎も皆來いと、大きな聲で喚ぶ者がありました。それにびっくりしてゐたら、魚籠の中の魚が、一度に皆飛び出して逃げてしまひました。其中に沼では大勢の聲で、えんとえんやらさあといふ懸け聲と共に、其蜘蛛の絲を引っ張り始め、見てゐる前で太い株根っ子が、根元からぽっきと折れて

しまつたさうです。その時から後は誰一人として、今にこの沼へ釣りに行く者はないさうであります(岩代伊達郡)。

泥鼈の親方

物を言はぬ人を、魚のやうに默つてゐるなどと、西洋の人は言ひますが、日本では魚の物言ふのを聽いた者が折り〳〵ありました。それから泥鼈なども物を言ふことがあるといふ話です。昔美濃の大垣から一里ほど東の中津といふ村で、或古池の水を替へ乾して、非常に大きな泥鼈を捕つたことがあります。其人が是を肩に荷うて、大垣の町の魚屋へ賣りに行きますと、途中に又一つの大池の堤を通る時に、其池の中から大きな聲で、おい何處へ行くぞといふ者がありました。すると背中の籠の中から、今日は大垣へ行くわいと答へました。びっくりしてゐますと又暫くして、同じ聲で池の中から、いつ歸るぞと問ひました。是にも籠の泥鼈は返事をして、いつ迄ゐるものぞ、明日はぢきに歸るわいと、耳元で大きな聲でわめきました。かういふのが池の主といふものであらうと思ひましたが、此男は中々きつい男であつたので、爰で弱い氣を出したら大變だと思つて、こと更籠に氣を付けて、蓋を押へ繩をしっかりと懸けて魚屋へ持つて行つて、好い値に賣つてしまひました。明日は還ると自分でも言つてゐるのだから、たゞ殺されてしまふやうなことはあるまい。どうなるか見てゐようと思つて、先づ賣つて來た金を近くの寺々へ納めて、御經を讀んでもらひました。さうして自分は今日を限りに、生き物を捕る商賣を止めてしまはうと決心しました。其翌日は町に行つて、昨日泥鼈を賣つた魚屋の店へ、通りかゝりのやうな顔をして寄つて見ますと、主人の方から聲をかけて、あの泥鼈は怖ろしいものであつた。刃物がなくては人間でも破れない池洲の中から、どうして出て行つたか見えなくなつたと言つて、驚いてゐたさうであります。これが恐らく泥鼈の頭であつたらうといふ話でありました(美濃)。

やろか水

むかし尾張の井堀といふ村で、秋のなかばに毎日雨ばかり降つて、木曾川の水が段々に高くなり、堤が切れるかも知れないと心配して、村の人たちが起きて水番をしてゐることがありました。或夜の眞夜中頃に、川の向ひの美濃の伊木山の下の淵あたりから、頻りにやろうかぁ、やろうかぁと喚ぶ聲がしました。一同は唯不思議に思ふばかりで、どうすることも出來ずに顔を見合せてゐましたが、いつ迄も其やろうかぁといふ聲が止まないで、しまひには怖ろしくなつて人夫の中の一人が、思はず知らず高い聲で、いこさばいこせぇと言つてしまひました。さうすると忽ち大水がどっと押し寄せて、見てゐるうちに此邊の田が全部、水の下になつたといふことであります。それで今でも其時の洪水を、やろか水と謂つてをります。今から二百五十年ほど前の、貞享四年の事だといふ人がありますが、

この大川の附近には、他にもさういふ話が村々にあるさうです（尾張丹羽郡）。

御辛勞の池

むかし肥後國の八幡村で、御社の近くの古池の水をさらへて、池の魚を捕らうとしたことがありました。八月一日の日であつたといひますが、朝から村の人たちが殘らず集まつて、せっせと水を汲み上げましたけれども、いつ迄經つてもかへ乾すことが出來ません。其うちに夕方になつて、もう大分底に近くなつたやうに思つてゐますと、だしぬけに見たことのない人が一人、其水の中から出て來ました。さうしてぴょこんと御辭儀をして、皆樣御辛勞と言つたかと思ふと、忽ち何處へか消えてしまつて、池の水はすぐに又もとの通り、池に一ぱいになつてしまひましたさうです。それからこの池の名を御辛勞の池と謂つて、誰も魚を捕らうとする者がなくなりました（肥後玉名郡）。

米良の上漆

むかし日向の米良の山里に、安左衞門十兵衞といふ二人の兄弟がありました。二人ともに米良の山奥に入つて、山の漆を掻いて渡世にしてをりました。ある時兄の安左衞門は山に行く路で、持つてゐた鎌を谷川の淵に落しました。水練の達者な男ですから、直ぐに裸になつて水に飛び込み、段々に深いところへ入つて見ますと、驚いたことにはこの谷川の淵の底が、一面の漆でありました。大昔から山々の漆の木の汁が、雨に流されて追々に溜つてゐたのを、今までは誰も知らなかつたのであります。是は又と得難い幸運に有り附いたと、安左衞門は一人で喜んで、毎日そこへ行つては少しづつ漆を取り出し、それを好い値に賣つて段々に金をこしらへました。近所の人たちは、何處であのやうな上等の品を手に入れて來るのかと、不審に思はぬ者はありませんでしたが、其中でも弟の十兵衞は、此

米良の上漆

頃兄が自分と同行せず、いつも隠れるやうにして出て行くのが氣になるので、色々としてそっと後から附いてあるくうちに、とう〳〵その祕密を見付けました。さうして自分も其淵の底へ入つて、漆を取つて來て賣るやうになりました。兄の安左衞門は是は困つたことになつた。どうか弟には取らせぬやうに、いつ迄も自分一人で取ることにしたいと思つて、いろ〳〵思案をしたあげくに、町の彫り物師に賴んで大きな木の龍の形を、念入りにこしらへさせました。角や鱗には赤青の繪具を塗り、金銀で眼を描いてまるで活きた龍の通りに作つて、それを誰にも知れぬやうに、窃かに谷川の落ち合に持つて行つて、水の力で自然と動くやうにしかけて置きました。弟の十兵衞は少しも是を知らず、次の日も爰へ遣つて來て、裸になつて入つて見ましたが、見るも怖ろしい大蛇が水の底から、眼をむき出して睨めてゐるので、近くへも寄れないでは〳〵の體で遁げて還りました。兄はこの樣子を遠くから見てゐて、これからはもう自分ばかりで、自由自在に漆を取ることが出來ると、喜び勇んで水の中に入つて見ると、確かに町の彫り物師にあつらへて、彫つてもら

つた木の龍でありましたけれども、いつの間にか魂が入つて本當に動きまはつてゐました。さうした安左衞門が漆を取りに行かうとすると、今にも一呑みにする勢ひで、大きな口を開けて向つて來ました。其樣なはずはないと思つて、何度も何度も戻つては又行つて見ましたが、どうしても氣味が惡くて、其傍へ行くわけに行きません。淵の底にはまだ澤山の漆があるのに、とう〳〵それを取り出すことが出來ませんでした。こんなくらゐならば始めから仲よく、毎日兄弟づれで取りに來た方がよかつたと、非常に後悔をしたさうであります。

蟹淵と安長姫

むかし〳〵隱岐島の元屋といふ村に、年とつた一人の樵がありました。或日、安長川の奥に入つて、瀧の後の山で木を伐つてゐましたが、つい誤つて手に持つ斧を取り落して、

瀧壺の小さな圓い淵の中に沈めてしまひました。さうすると忽ち其淵に浪が起り水煙りが立つて、そこら邊が眞暗になりました。さうして水の中から黑い刺の生えた棒のような物が、浮び上つて來ました。爺はこの樣子を見て非常に驚き怖れて、一目散に山の麓の方へ逃げて來ますと、後から誠に優しい聲で、爺よ、少し待つておくれといふ人があります。振り返つて見ると、繪にあるやうな美しい若いお姫樣が、ちようど其瀧の所に立つてをられました。私は安長姫といつて、昔から此淵に住む者だが、何時の頃よりか爰には大きな蟹が來て住むことになつて、夜も晝も私を苦しめてゐた。今日はそなたが斧を落してくれたによつて、惡い蟹は片腕を切り落されて弱つてゐる。今大きな刺の生えた其腕が、流れて行つたのを見たであらう。その御禮を言はなければならぬが、まだ片方の腕が殘つてゐるので、安心をしてゐることが出來ぬ。蟹は今淵の底の横穴の中で、腕の痛みで唸つてゐる。どうかもう一度この斧を、瀧の上から落しておくれと言つて、さつき水に沈めた斧を手渡ししました。爺は怖ろしながら水の神を御助け申したいと思つて、再びもとの山に戻つて

言ひつけられた通りに、其斧を高い所から瀧壺に投げ入れますと、姫神は大そうに御喜びで、是から後は富貴長命、なんなりともそなたの願ふまゝと言つて、林の中に歸つて行かれました。それから幾日かの後、甲らの周りの一丈もある蟹の、大爪の兩方ともないのが、死んで海の口へ流れて出たのを、村の人が見つけまして、樵の爺の言つた話を、本當だと思ひました。さうして川の名を安長川、瀧壺を蟹淵と呼ぶやうになつたのださうです。この川の流れはどんな旱の年でも水が絶えませぬ。さうしてこの水の神に雨乞ひをするときつと雨が降るといふことであります(隱岐周吉郡)。

龍宮の鐘

むかし近江國に粟津冠者といふ武勇の士がありました。御寺を建てましたがまだ釣り鐘がないので、釣り鐘を鑄る鐵を買つて來ようと思つて、越前から船に乘つて、出雲國へ鐵

を求めに出かけました。日本海を船で走らせてゐますと、俄に風が惡くなり、浪が打ち込んで來て、どうしても船が進みません。船頭も乘客も皆困つてゐたところへ、何處からともなくごく小さな小舟に、子供がたゞ一人で梶を取つて、近くまで遣つて來ました。その船に近江の粟津冠者といふ人が乘つてゐるだらう。急いでこの小舟に乘り移つて下さいと言ひました。どういふわけかは解りませんでしたが、粟津冠者はその言ふ通りに、今來た小舟に乘り移りました。さうすると浪も風もなくなつて、親船は少しも走りません。暫くの間爰で待つてゐるやうに言ひつけて、小舟は忽ち海の底へ入つて行くかと思ふと、そこがもう龍宮の立派な御殿の門でありました。龍王が粟津冠者を迎へに出て來られまして、あなたは世に隱れもない弓矢の達人であると知つて、是非とも御賴み申したいことがある。今この龍宮には怖るべき大敵があつて、毎日家來を引き連れて攻め寄せて來る。どうか其弓勢を以て我々を助け、今日の仇を打ち滅ぼしてもらいたいと言はれました。粟津冠者は名譽な賴みである故に、即座に承知をして龍宮の高殿に昇り、支度をして待つてをり

ますと、やがて遠くの方から見上げる程の大蛇が、數多の同類を引き連れて攻めて來ます。その大きく開いて來る口を目がけて、眞正面から鏑矢を射放して、舌の根より喉の下まで射貫きました。それに畏れをなして大蛇が逃げて歸らうとするところを、又一箭今度は中程を射かけたさうであります。龍王を始めとし、多くの臣下達も大喜びで、何を今日の骨折りの御禮にしたらよいかと問ひましたが、粟津冠者の今度の旅行は、新たに建立した御寺の釣り鐘がまだないので、其材料の鐵を買ふ爲に、海を渡つて出雲まで行かうとしてゐるだけで、他にはなんの望みもないと言ひますと、それならばいと安い事だと、早速龍宮の御殿に懸けてあつた鐘をはづして、これを御進物に贈られました。近江の粟津の廣江寺の釣り鐘が、龍宮からの御みやげの鐘であつたと言ひますが、其御寺はもうとつくにありません。武藏坊辨慶が背負つて行つて、比叡山の中腹から轉がしたといふ今の三井寺の大釣り鐘が、その龍宮の鐘だといふ話もありましたけれども、確かなことはもう誰にもわかりません。

山父のさとり

昔ある所に一人の桶屋がありました。雪の降つた朝、外に出て爲事をしてをりますと、山の方から一つ目一本脚の、怖ろしい怪物が遣つて來て、働いてゐる桶屋の前に來て立ちました。桶屋はそれを見て慄へながら、是が昔から話に聽いてゐる山父といふものだなと思ひました。さうすると其怪物は、おい桶屋、おまへは是が山父といふものだらうと思つてゐるなと言ひました。是は大變だ、此方の思つてゐることを、直ぐにあゝして言ひ當てると思ひますと、おい桶屋、おまへは今思つてゐることを、すぐに覺るから大變だと思つたなと又言ひました。それから後も、なんでもかでも思ふとぢきに覺られるので、桶屋は困つてしまひました。さうして仕方なしにぶる〳〵慄へながら爲事をしてゐますと、思はず知らずかぢかんだ手が滑つて、箍の竹の端が前へ走り、山父の顏をぱちんと打ちました。山父は是にはびつくり仰天して、人間といふやつは時々思つてゐないことをするからこわい。爰にゐるとどんな目に逢うか知れないと言つて、どん〳〵又山の方へ、遁げて行つてしまつたさうであります(阿波)。

飯食はぬ女房

これも昔々ある村に、一人の桶屋が住んでゐました。或日の晩方に外へ出て小便をしながら、あゝあゝ飯を食はぬ嬶が一人欲しいもんだなぁと獨り言を言ひました。さうすると其晩見たこともない女が尋ねて來て、飯を食はぬ嬶の欲しい桶屋さんは此方ですか。私は飯を食はぬ女です。さうしてよく働きますから嬶にして下さいと言つて、いくら斷つても歸つて行きません。致し方がないから女房にして家に置きました。なるほど善く働いて、少しも食事をしませんが、どういふわけか、米が知らぬ間にぐん〳〵減りました。それを

不審に思つて一度樣子を見る積りで、爲事に行く支度をして家を出かけ、そっと天井に上つて隱れて覗いてをりました。さうすると女房はやがて竈に大きな釜をかけて、俵からどっさり白米を量り出して、さく〳〵と洗つて飯を炊き始めました。それから物置からうんと味噌を持つて來て、大鍋に一ぱい味噌汁を沸かしてそれを柄杓で桶の中に汲みこみました。其次には戸板を一枚、はづして來て臺所の上り口に敷き、煮えた米の飯を片端から、大きな握飯にこしらへて、其上へ並べました。さうして置いてから、今度は髪をばら〳〵に解きますと、頭の眞中に別に大きな口が一つありました。其口の中へ握飯を一つづゝほうり込み、杓で一杯づつ味噌汁を流し込んで、見てゐるうちに汁も飯も、殘らず食べてしまひました。さうした後で頭の髪をふやんと結び直すと、元の通りのよさゝうな女房になりました。

この女は山母であつた。こいつは飛んでもない嬶をもらつてしまつた。なんでも早く追ひ出さなけゝやならぬと思つて、知らぬ顏をして夕方に、草鞋に土を附けて歸つて來ました。いくら飯を食はなくとも、おまへは家の嬶には向かない。なんでも遣るからどうか往つてくれと言ひますと、それでは行きますからどうか大きな桶を一つ、こしらへて下さいと申しました。桶なら安い事だと早速こしらへて遣りますと、山母の女房は桶屋の油斷を見すまして、出しぬけに男を大桶の中に突き落しました。さうして其桶を頭の上に載せてさっさと山奥の方へ歸つて行きました。桶屋は桶の中から逃げ出さうとしますが、桶が大きいので飛び出すことが出來ない。そのうちに段々山路になりますと、路の片脇に大木があつて、其枝がから〳〵と桶の緣にさはりました。山母はやがてある一本の大木の陰に、少しの間立ち止まつて小休みをしました。ちょうどよい折りだと思つて桶の底から手を伸ばして、垂れてゐた枝につかまりますと、體は桶から拔けて出しました。山母はそれを知らずに、空桶をかついで奥の方へ行きました。此隙に逃げなければならぬと、一しょう懸命に走つて還りますと、山母はそれを心づいたか、振り返つてどん〳〵と追つて來ました。里まで行くうちには追ひ付かれる。何處か隱れる所はないかと見まはしたところが、ちょ

うど谷川の川原に菖蒲が茂り、又其續きには蓬が茂つてをりました。それで其二いろの草の間に潜つてをりますと、山母も追つかけて來て其中へ飛び込みました。

ところが非常に幸ひなことは、菖蒲の葉が山母の右の目を突き、蓬の莖が左の目を突き破つて、山母は忽ち盲になり、さうして谷川の流れに墮ちて、死んで流れて見えなくなつてしまひました。其日は五月の五日の日であつたさうです。それから後は此日を節供と謂つて、必ず蓬と菖蒲と二いろの草を屋根に葺き、又其葉を湯に入れて浴みすることになつたのですが、これは二度と再びこの桶屋のやうな、ひどい目に逢はぬ用心だといふことであります（陸中膽澤郡）。

牛方と山姥

昔々ある一人の牛方が、澤山の鹽鯖を牛の背に積んで、山の在所へ賣り行く途中、高い

牛方と山姥

大きな峠を越えようとする時に、運悪く山姥に行き逢ひました。牛方々々、鯖を一尾くれと言ひます。仕方がないから荷の中から鯖を一つ拔いて、投げて遣つて急いで通りましたが、牛が遲いのですぐに其鯖を食べてしまつて、又後から追ひついてねだりました。かうして一尾づつ拔き出しては投げて遣つてゐるうち、とう〳〵牛に附けてゐた澤山の鹽鯖は殘らず山姥に食べられてしまひました。鯖がなくなると其次には牛を食はせろ食はせないとおまへを食ふぞと言ひました。怖ろしくてたまらぬから、牛をそこに置いて急いで逃げて來ますと、それも瞬くうちにめり〳〵と食べてしまつて、又追つかけて來て、今度は貴樣を取つて食ふと言ひました。是だけはなんとしても承知をするわけには行きません。一しょう懸命に走つて逃げて、大きな池の堤まで來ました。堤の上には大きな樹がありました。急いで其樹に登つて隱れようとしましたが、あひにく下の方には葉がないので、牛方の影が沼の水に映りました。

山姥は息を切つて飛んで來ましたが、あわてゝ沼の中の影を牛方かと思つて、水に入つ

て方々を搜しまはりました。其暇に漸くのことで樹から下りて來て、牛方は又走つて逃げました。さうすると山の下に一軒の家があるので、急いで中に入ると、それが又今の山姥の住家でありました。そっと天井に上つて梁の間に隱れてをりますと、やがて山姥は沼から出て、今日は牛方に構つてゐてえらく草臥れたと、獨り言をいひながら歸つて來ました。さうして圍爐裏に火を焚いて、又餅を出して來て燒き始めました。餅が段々燒けて來るうちに、山姥はこくり〳〵と居睡りをしてゐます。梁の上に隱れてゐる牛方は、屋根の裏から茅の棒を一本拔いて、燒けた餅を一つゞつ突き刺して取つて食べました。姥が眼を覺まして誰が取つたとどなると、小さな聲で火の神火の神を言ひました。山姥は一きれの餅が渡し金から轉げて、眞黑に焦げてゐるのを拾つて、火の神樣なら仕方がないと言ひました。それから今度は鍋を掛けて、又甘酒を沸かします。さうして其甘酒の溫まるの待つてゐて、又居睡りを始めましたから、牛方は長い茅の棒をもう一本拔き出して、梁の上から甘酒を吸つてしまひました。山姥が眼を覺ましてゝ、誰が飲んだとどなると、牛方は又小

さな聲で、火の神火の神と言ひました。こんな晩には寢た方がよい。石の唐櫃にしようか木のからとにしようか。石は冷たい木のからとがよからうと言つて、大きな樹の唐櫃の蓋を開けて、其中に入つてぐう〳〵と鼾をかいて寢てしまひました。牛方は其樣子を見てゐて、そつと梁の上から下りて來て、圍爐裏の火を焚きました。さうして湯をぐら〳〵と沸かして置いて、錐を持つて來て木のからとの蓋に穴をあけました。からとの中の山姥は其音を聽きながら、明日は天氣だげで、きり〳〵蟲が鳴かぁやといつてゐましたが、其うち熱い湯を其穴から注ぎ込まれて、とう〳〵牛方に讐を打たれてしまひました(越後)。

天道さん金綱

昔々ある村に、母と三人の子とが住んでをりました。母が三人の子に留守番をさせて、寺參りに出かけた後で、山姥が母に化けて歸つて來ました。山姥の手はさはつて見ると直

ぐにわかるのですが、子供を騙すつもりで芋がらを卷いて來たので、子供は母の手だと思つて戸を開けて中へ入れました。山姥は三人の子の一番小さいのを抱いて、奥の間に入つて寢ました。さうしてがり〳〵と其子を食べてしまひました。次の間に寢てゐた二人の子は其音を聽いて、何を食べてゐるのかと山姥の母に尋ねますと、小さな一本の指を奥の間から投げてよこしました。それを見ると直ぐに山姥だといふことがわかつて、二人の大きな子は逃げて出る相談をしました。最初に二番目の子が便所に行くと言ひますと、山姥が兄の方に戸を開けてやれと言ひました。それで二人は家の外に出て、井戸端の桃の木に鉈で切り目を付けて、それを傳つて木の上に登りました。山姥は後を追つかけて方々を搜してゐるうちに、井戸を覗いて見たので桃の木の上にゐる子が見つかりました。どうして其木へ登つたかと山姥が尋ねます。鬢つけ油を塗つて登つたと、頭の兒がうそをつきました。山姥は鬢つけを持つて來て桃の木に塗りますと、つる〳〵と滑つてどうしても登ることが出來ません。二番目の子がそれを見て笑つて、鬢つけ油を附けて登れるものか。鉈で

切り目を附けて登るのだと言ひました。山姥はそれを聽いて、鉈で切り目をつけて登つて來ます。二人の子は困つてしまつて、空を見上げて、天道さん金ん綱と大きな聲で呼びますと、がら〳〵と音がして天から鐵の鎖が下つて來ました。それにつかまつて子供たちは天に登りました。山姥も其後から、同じようにどなりましたが、今度は天から腐れ繩が下つて來て、それをつかまへて登らうとした山姥は、高い所から落ちて來て蕎麥畑の中で、石に頭を打ち割つて死んでしまひました。蕎麥の莖はその山姥の血に染まつて、其時からあのやうに眞赤になつたのださうであります(肥後天草郡)。

鬼と神力坊

昔阪本八幡の神力坊といふ山伏の家へ、毎度秩父の山の鬼が遊びに來て、大酒を飲み御馳走をねだり、又色々の無理難題を言ひかけて、困り拔いてゐたことがあつたさうです。其時に神力坊が工夫をして、なんとかしてもう懲りて來ぬやうにしようと思つて、村の人たちに賴んで置いて、鬼が遣つて來た日は一日の中に、畠の麥を苅つてしまうやうに支度をしました。さうして酒の肴には白い石を四角に切つたものと、竹の根を輪切りにしたものを用意して、自分には別に豆腐と筍との煮たのを、皿に附けて置きました。そんな事は知らないで、鬼は例の通り大いばりで御馳走を食べようとしますと、竹の輪切りでも石でも、みんな堅くつて齒が立ちません。それで閉口して見てゐる前で、亭主の神力坊は本物の豆腐と筍とを、平氣でむしゃ〳〵と食べてしまひました。どうです鬼さん、人間の

歯は先づこの位丈夫に出來てゐるのだから、嚙まうと思へばなんでもかでも嚙むことが出來ます。まだそればかりではありませんよ、人間は地面をひっくり返したり、皮を剝いたりすることも出來るのです。まあ出て御覽なさいと言つて、神力坊は鬼を案内して家の外に出て見ますと、今朝ほど鬼が來る時までは、一面によく熟して黄いろかつた村の麥畠は、いつの間にか殘らず苅り取られて、その半分は鋤きかへして、眞黒の土になつてをりました。鬼はそれを見て成程人間は鬼よりもえらい。鬼にはとても出來ない事ばかりする。うっかり人間の所へ來て、いばり散らすことは出來ないと思つて、逃げて還つてしまつたかどうか。その點は御話が殘つてをりません。しかし兎に角にもう餘程久しい以前から、山の鬼がこの村へ、來なくなつてゐることだけは確かであります（武藏秩父郡）。

金剛院と狐

昔々ある所に、金剛院といふ山伏の修驗者がありました。旅をしてゐて久しぶりに、元氣よく自分の村に還つて來ましたが、村の入り口の岡の陰に、大きな狐が一匹いゝ心持ちさうに晝寢をしてゐるのを見つけました。金剛院はそっと拔き足をして、寢てゐる大狐の傍へ近より、手に持つてゐた法螺の貝を、狐の耳元で聲高に吹き鳴らしました。さうすると狐はびっくりして飛び上がり、轉がるやうにして逃げて、遠くの草の中に隱れてしまひました。

これが狐には餘程くやしかつたと見えて、いつの間にか讐討ちをたくらんでゐたのであります。ちょうどこの次の日の晩に、町に修驗者の寄り合ひがあつて、昨日還つて來た金剛院も出て來ることになつてをりました。村々の山伏たちは、方々から集つて來まして、連れだつて町へ出ようとする途で、實に珍らしいものを見ました。一匹の狐が人の通るのも氣が付かぬらしく、池の端に立つて水鏡を見ながら、頻に草や木の枝を頭に載せ、肩に掛けてゐます。何をするのだらうとそっと見てをりますと、やがてぶる〳〵と身を振はせ

て、忽ち金剛院の姿になりました。さうして足早に何處へか隱れてしまひました。憎い狐ぢやないか。あゝして今に遣つて來て、我々を騙すつもりであらう。來たら引っ捕へて松葉いぶしにしてやらうと相談して、山伏たちは待ち構へてをりました。本物の金剛院は、そんなことなどは夢にも知らず、少し遲れて集會の席へ出て來ますと、やゝ金剛院よく來られたと言つて、一同が手を取つてまん中へ押し出しました。若い山伏が尻を探つたり耳を引っ張つたりします。何をするのかといふ間もなく、はや誰かゞ繩を持つて來てぐる〳〵卷きにしてぶちました。さうして青松葉をうんと焚いて、息が出來ないほど燻したり敲いたりしました。金剛院は狐が化けて來たのだと疑はれてゐることを知つて、決して狐でないといふ證據を、色々として見せましたから、漸くのことで繩を解いてもらふことが出來ました。實は昨日外から歸つて來るときに、罪もない狐を法螺貝で驚かしたから、狐がそれを怨んでわざと化けるやうな風を見せて、かうして皆にいぢめさせて、し返しをしたものであらう。もう是からは晝寢をしてゐる狐を見つけても、決して法螺貝などは吹かぬやうに、しようといふことになつたさうであります（紀州西平婁郡）。

俄か入道

昔ある村で、惡い狐が出て惡戯ばかりして困つてゐた頃に、おれは決して狐などには化かされないと言つて、獨りでいばつてゐた人がありました。その人が他所から還つて來ますと、路の下の川原で一匹の狐が、朴の木の葉を頭に載せて女になり、川の藻を採つて圓めて、赤ん坊の形にして抱いてゐるのを見かけました。この畜生、人をばかす積りだな。よしどうするか見てをれと言つて、路傍の石を拾つて上から投げ付けますと、それがちようど赤ん坊に當つて、一打ちで死んでしまひました。母親は泣いて怒つて、子供を元の通りにして返せと言ひます。なんだ手前は狐ぢやないかといふと、ます〳〵腹を立てゝ承知をしません。さうして何時まで經つても狐にならず、見れば見るほど人間の親子に相違な

いので、それでは見損なつたか、飛んだことをしてしまつたと思つて、色々と言葉を盡してあやまりましたけれども、中々一通りのことでは宥してくれませんでした。それでは仕方がないから坊主になつて詫びをすると言つて、近くの御寺まで一しょに行き、和尚樣にわけを話して頭を剃つてもらひました。其和尚樣の頭の剃り方が非常に痛い。餘り痛いのでやつと正氣になつてあたりを見ますと、もう先刻の母親も赤ん坊もをらず、和尚も御寺もありませんでした。さうして剃つてもらつたと思つた頭の毛は、みんな狐に喰ひ切られてゐたのだつたさうです（武藏）。

小僧と狐

昔々ある山寺に、ずゐてんといふ小僧がありました。和尚樣がよそへ行つて一人で留守居をしてゐますと、きつと狐が庫裡の口へ來て、ずゐてん、ずゐてんと呼びました。あまり憎らしいので本堂の窓へまはつて覗いて見ましたら、狐は入り口に背なかを向けて立つてゐます。さうして太い尻尾で戸をこすると、ずゐといふ音がする。それから頭を戸にぶつつけると、てんといふ音がするのでありました。賢い小僧さんだから早速戻つて來て、そつと戸口の脇に來て立つてゐて、ずゐといふ音がした時にがらりと戸を開けますと、てんと戸を叩かうとしてゐた狐は、庫裡の庭へ轉げこみました。すぐに其戸を締めて置いて、棒を持つて來て狐を追つかけましたが、そのうちに狐の姿は見えなくなつてしまひました。それから本堂の方へ行つて見ますと、いつの間にか本尊のお釋迦樣が二つになつてゐて、どちらが狐の化けたのやら、見分けることが出來ませんでした。なぁにそんな事をしたつてすぐにわかるさ。うちの御本尊樣は御勤めを上げると、舌を御出しになるから間違ひっこはないと言つて、ぽん〳〵と木魚を敲いて御經を讀んでゐますと、急いで狐のお釋迦樣は長い舌を出しました。それでは是からうちの佛樣に、庫裡の方で御佛供をさし上げましよう。狐に化けたのは殘して置いてと言ひながら、さつさと臺所へ歸つて來ますと

後から贋物の本尊様が、のこ〳〵とあるいて出て來ました。それでは先づ行水を上げましようと、土間の大釜の中へ抱いて入れて、しっかりと蓋をして火を焚きました。さうして和尚様の還つて來られるまでに、狐のまる煮をこしらへて置いたといふ話であります(羽前)。

片目の爺

むかしむかし奥州の或田舍に、爺と婆が住んでゐました。婆はちゃんと目が二つありましたが、爺の方は片目でした。ある日の晩遅くなつてから、ばゝな〳〵今還つたぞと言つて、右片目の爺様が左片目になつて歸つて來ました。はゝあ是は狐だなと婆様は思ひました。爺なは又酔つて來たな。酔つて還るといつもの癖で、俵さ入らうといふべなと言ひますと、爺様はなにや又と言つて、自分で俵の中へ入りました。俵さ入ると上から繩を掛けろといふべなと言ひますと、俵の中の狐の爺様は、なにや又と言つておとなしく繩を掛け

られました。繩あ掛けると又いつもの癖で、火棚さ上げて燻せといふべなと婆がきゝますと、やはり狐の爺は何や又と言ひました。それで圍爐裏の上の火棚へはふり上げて、どんどんと火を焚いて狐を困らせました。それからわざと魚などを燒いて、いゝ香りをさせて婆一人で御飯を食べました。さうしてゐるうちに右片目の、本物の爺が還つて來ました。それで火棚の上の左片目の爺は、とう〳〵狐汁になつてしまつたさうであります(陸中)。

比治山の狐

むかし廣島に一人の能役者がありました。或日海岸の村の祭りに行つて、夜おそく一人で比治山の下の路を歸つて來ました。あまり北風が吹いて寒いので、懷に入れてゐた能の面を出して、風よけにそれを被つてあるいてゐました。さうすると不意に比治山の上から、一人の男が降りて來て、もし〳〵と言つて喚び留めました。あなたは實に珍らしいも

のを被つてお出でになる。それはなんといふものですかと言つて尋ねます。是は能の面といふもので、被つて舞ひを舞ふものだと答へますと、それを被りさへすればいつでもそんな顔になれるのですか。實は私はこの比治山に住んでゐる狐ですが、一つあなたのやうに化けて見たいから、是非その面といふものを私に讓つて下さいと言ひました。あんまり熱心に賴みますので、とう〳〵役者も承知をして、其面を取つて狐に遣つて家に歸つて來ました。それから暫くして廣島の殿樣が、狩りに出て大勢の家來を連れて、比治山の下を御通りになつたところが、をかしな狐が一匹山の上から出て來て、少しも人を恐れずに其邊をうろ〳〵してをりました。それ狐が出たと言つて多くの武士が、集まつて來てすぐに打ち殺しましたが、よく見ると以前に能役者の持つてゐた面を被つてゐたさうであります。面さへ被れば體迄が、人になるものと思つてゐたらしいので、狐の中ではこの比治山の狐が、一番愚かものであつたらうといふことであります。

芝右衞門狸

芝右衛門狸

むかし淡路の芝右衛門狸の所へ、阿波の禿狸から、化け競べをしようと言つて來たさうであります。芝右衛門狸は承知をして、海を渡つて阿波國へ遣つて來ました。先づ最初には禿狸が、阿波の殿樣の御渡海の樣子を化けて見せました。澤山の船が遠く近く、海の上につら〳〵と竝んで、色々の幟や吹き流しが風に靡いて、御座船からは水手の船唄の聲が聞えて來ました。芝右衛門は感心して、今までこんな上手な化け方は、見たことがないと言ひました。それでは私も一つ御大名のお行列を化けて御目にかけましよう。いつ幾日の御晝前に、舞子の濱に行つて、あの松の樹の上から見てゐて下さいと約束しました。禿狸は約束の通りに、早速播州へ渡つて行つて、舞子の濱の松の上に、そっと登つて待つてゐますと、やがて西の方から長い何本もの毛槍を立てゝ、下に下にと言つて行列が進んで來

ました。馬や御駕籠の飾りが光るやうで、供の武士たちは皆こわい顏をしてゐました。禿狸はすっかり感心してしまつて、思はず松の樹の上で手を叩いて、芝右衛門どの見事見事、まるで本物の通りと、大きな聲で褒めました。

禿狸が感心したのも無理はありません。それは本物の御大名の行列だつたのであります。芝右衛門はちやんと前からこの御通りを知つてゐて、それを禿狸に見せたのでありました。御伴の武士は禿狸を見つけて、あれあんな所で狸めが嘲弄をしてゐる。無禮なやつだと言ふよりも早く、飛んで來て槍で突き落してしまつたさうです。四國で最も名高かつた阿波の禿狸は、かうして淡路の芝右衛門に騙されて、死んでしまつたといふ話であります。さうかと思ふと阿波の方では、禿は今でもまだ達者に暮してゐるやうにいふ人もあります。狸のことですから確かなことはよくわかりません（淡路）。

山伏の狸退治

むかし石城の榊高野といふ村で、或百姓の家の色々の道具が、毎日々々見えなくなつたことがありました。是は多分狸の惡戯であらうといふことで、方々の修驗者を賴んで來て、御祈禱をしてもらひましたが、少しもきゝ目がなくて、やはりお椀や箸のような物までが、いつの間にかなくなるので、山伏たちも弱つてしまひました。

さうすると一番おしまひに賴まれて來た山伏が、私ならばこんなものはわけはない。きっと退治して見せると言ひました。しかし祈禱をするには少しばかり入用の品物がある。急いで買つて來るからと言つて、平の町へ買ひ物に出かけました。其後で家の者が氣が付いて見ると、よっぽど慌て者の法印さまだつたと見えて、小さな風呂敷包みを一つ忘れて置いて行きました。是がなくては困るかも知れない。早く知らせて上げようと言つて、外

へ出て大きな聲で喚んだり、人を走らせて見たりしましたが、とう〳〵追ひ付くことが出來ませんでした。さうして歸つて來て家に入つて見ると、もう今の間に其包みが、何處へ行つたか知れなくなつてをりました。

それから稍久しく待つてゐるうちに、法印さんはひょっこり歸つて來ました。家の人たちが氣の毒がつて、風呂敷包みのなくなつた事を話しますと、それでいゝそれでいゝと言つて、少しも心配せずに只笑つてをります。さうして皆と一しょになつて、家中をよく探して見ると、緣の下の一番奥の方に、古狸が一匹死んでゐたさうであります。なくなつた道具類も、大抵は其あたりにありました。狸は手に大きな握飯を持つたまゝで、半分食べかけて死んでゐたといふことであります。是はまちんといふ狸の毒藥を、其握飯の中に入れて置いて、風呂敷に包んでわざと忘れて行つたのであると、法印さんが笑ひながら話したさうであります（磐城石城郡）。

湊の杙

むかし三河の平阪の湊に、悪い狸がゐて毎度船頭たちを困らせました。その狸の一番よくない悪戯は、杙に化けてゐて船頭に小舟を繋がせることでありました。さうして舟の者が陸へ上つて遊んでゐるうちに、其舟を何處かへ持つて行つてしまふのであります。平阪の湊には杙などはちっともなかつたのですが、夕方に他所から來た船頭などは、狸が化けてゐることを知らないので、是はちょうど好い所に杙があつたと、うっかり繋いで置いては小舟を流してしまふのでありました。

かういふ狸の悪戯に懲りてしまつて、段々に平阪の湊へ遊びに來る者が少なくなりました。そこで土地の元氣のいゝ人たちは、是は是非とも狸退治をしなければならぬと、ある月夜の晩に、繩だの棒だのを小舟の中に匿して、三四人の若い連中が漕いで出ました。土

手の陰だけが少し暗くて、水の上は平一面に白く光つてゐる晩でありました。此邊から上つて行くとよいのだが、何處にも杙がないなぁと、わざと一人が大きな聲で言ひました。さうすると何時の間にか土手の近くに、太い一本の杙がにょきと出てゐました。若い人たちは互ひに目を見合はせて、少しも知らぬ顔をして其傍を漕いで通らうとしますと、水の中から小さな聲で、くいっ、くいっ、といふ者があります。狸は元來少し智慧が足りないので、誰も氣が付かぬのをもどかしがつて、こんな聲を出したのでありました。あゝ爰に太い好い杙があつたのに、ちっとも氣が付かなかつたと皆して笑つて、舟の中から綱を出して、早速其杙を縛りました。いつもの倍以上もある長い綱でありました。それでぐるぐると丈夫に舟を繋いで、それから次には棒を出して、寄つてたかつて其杙を打ちました。さうすると忽ち杙が泣き出して、狸の化けの皮は露れ、とう〳〵悪狸は退治られてしまつたさうであります。めでたし〳〵（三河幡豆郡）。

狐が笑ふ

むかし美作の或山の峠の上に、一軒家の茶店があつて、喜兵衛といふ人の夫婦が住んでをりました。その喜兵衛の茶屋へ、或日の晩おそくなつてから、立派な身なりをした旅の武士が、入つて來て休みました。よく見るとそれは狐の化けたのでありました。袴や著物や大小の刀ばかりは、本當の武士の通りでありましたが、まだ一向未熟の狐だつたと見えて、少し毛があつて顔は尖つてをりました。耳も三角で突っ立つてをりました。それを自分では知らぬものだから、よく化けたつもりで大そう威張つてをりました。喜兵衛はをかしくて堪りませんが、やっと我慢をして笑はずにゐました。しかしどうするか見て遣らうと思つて、金盥に水を一ぱい汲んで來て、御使ひなさいましと其狐の武士の前に置きますと、暫くしてから狐は水を使ふつもりで、うつむいて自分の顔を水に映して、始めてまだ

化けきれずにゐたのに氣が付きました。さうして非常に驚いた聲を出して、茶屋を飛び出して何處へか行つてしまひました。

その次の日に、喜兵衛は一人で山へ木を伐りに行きました。さうして還つて來ようとしてゐますと、出しぬけに林の中から、喜兵衛さん喜兵衛さんと、小さな聲で呼ぶ者があります。姿は見えなかつたけれども返事をしますと、喜兵衛さん、昨晩はをかしかつたなぁと其聲が言ひました。それぢゃ昨晩の狐だなと、喜兵衛さんにはすぐわかりました。昔は狐でも此通り正直で、人と一しょに笑ふことが出來るものと、多くの山の人は思つてゐたのであります。

夢を買うた三彌大盡

むかし日向國の三彌といふ大金持ちが、まだ貧乏な旅商人であつた時、夏の日に仲間の者と二人づれで、或山路を越えて寂しい高千穗の村へ入つて行きました。あんまり暑いから少し休まうと言つて、路の横手の樹の陰に横になつて、友だちは直ぐに睡つてしまひました。それを三彌がまだ起きて見てゐますと、一匹の蜂が寢てゐる男の鼻の穴から飛び出して、どこか遠くの山の方へ飛んで行きました。妙なことがあるものだと思ふと、やゝ暫くして其蜂は還つて來て、再び其男の顏のまはりへ來てゐなくなりました。それから眼を覺まして其友だちが言ふには、今實に珍らしい夢を私は見た。なんだかこの近くの山でもあるらしかつたが、あるいて見ると一谷が、金で一ぱいになつてゐる所があつたと語りました。それは誠によい夢だ。それを私に賣つてくれぬかと言ひますと、夢なんか何になる

ものか、ばかなことを言ふといひましたが、とう〳〵御酒か何か此男の好きなものを遣つて、夢をこちらへ買ひ取ることにしました。それから幾日かの後に、三彌は又一人でこの土地へ戻つて來て、毎日々々一しょう懸命になつて、山といふ山を探しまはりました。さうしておしまひに見つけ出したのが、外錄といふ金山であつたさうであります。それが三彌の一代の間、夢で見た通りに莫大の金を出して、またゝくうちに九州一の大盡になりました。不思議なことには此人が死んでしまふと、すぐに大地震が起つて山が崩れ、今では其跡は一つの沼になつてゐるといふことであります（日向西臼杵郡）。

蛸島の虹

是もむかし能登國蛸島の湊に、柳何がしといふ人がありました。或日一人の若い者を連れて、鯖を釣りに小舟に乘つて沖に出ましたが、面白いほど鯖が澤山に釣れるので、還る

ことも出來ないでいつ迄も釣つてをりますと、舟を漕ぐ若い者は退屈をして寢てしまひました。主人は暫くして、ふと氣が付いて見ますと、何處から來たものか、三匹の虻が飛びまはつて、頻に寢てゐる男の鼻の穴から、出たり入つたりしてゐます。こんな沖中に虻などの飛んで來るわけはないがと思つて、其若者の寢てゐるのを搖り起しました。若者が起きて言ふには、私は今實に珍らしい夢を見てゐました。村の丸堂の中から三體の佛樣が、三匹の虻になつて飛んで出られたのを、どこ迄行かれるのかと見屆けようとしてゐるうちに、貴方が御起しになつたのですと申しました。主人は之を聽いて、それはなる程奇妙な夢だ。それでは今日の鯖を殘らずお前に上げるから、其夢を私に賣つてくれぬかと言ひました。夢なんか若し買つて下さるならば、幾らにでも賣りませうと言つて、男は澤山の鯖を貰つて、喜び勇んで共々に還つて來ました。柳の主人は其足で直ぐに、村の丸堂といふ御堂の在る所に行つて見ますと、果して夢の話の通り、御堂の壁の隙間から三つの虻が、出入りをしてをりました。笠を手に持つて待つてゐて、そっと其虻を押へて大急ぎで家に

歸り、座敷の中で其笠を除けて見ますと、虻ではなくて一寸八分ほどの、美しい三つの御佛像でありました。是を三つとも家に置いては、あんまり慾が深過ぎると思ひまして、阿彌陀樣は村の勝安寺といふ御寺に納め、辨天樣は湊の外の、小さな島に持つて行つて、今でもそこを辨天島といつてをります。さうして殘りの毘沙門さまの像だけは、今でも大事にして、この家で祭つてゐるといふ話であります（能登珠洲郡）。

だんぶり長者

昔々奥州のまた奥の郡に、だんぶり長者といふ途法もない大金持ちがあつたさうです。家には三千人の家來があつて、一日に百石づつの御飯を炊きました。其御飯の米を磨いだ白水が、米代川へ流れて出た爲に、今でも米代川の水は白く濁つてゐるのだといつてをります。此だんぶり長者が都に登つて、長者の御印を戴きたうございますと御願ひ申しまし

た時に、長者といふものには天から授かつた寶物がなくてはならぬ。人間第一の寶は子寶である。その子寶が有るかといふ御尋ねがありました。私は小豆澤の大日如來に信心をして、授つた女の子がたゞ一人あります。今度も都見物のために、連れて參つてをりますと申し上げました。喚び出して御覽になりますと、玉のやうに美しい姫でありましたので、後に貴い方の御妃になされたさうであります。

だんぶり長者は若い頃には、正直でよく働くたゞの百姓でありました。山に入つて小屋を掛けて、夫婦で山畑を拓いて耕作をしてをりました。ところが或日の晝休みに、大きな口をあけて畠の脇に晝寢をしてゐるのを、女房が起きて見てゐますと、向ひの山の下から一匹の蜻蛉が、二度も三度も飛んで來ては、男の顏の上や口のまはりを飛びまはりました。不思議に思つてゐるうちに眼を覺まして、おれは今なんとも言はれない好い酒を飲んだ夢を見たと言ひました。そこで女房は蜻蛉の話をしまして、どういふわけだらうと思つて、二人でその山の陰に行つて見ますと、岩の下からきれいな泉が流れてゐて、掬んで見

るとそれが泉酒でありました。さうして又その同じ山からは、幾らでも黃金が出て來ました。其黃金をどし〳〵と採つて還つて來たので、忽ちこんな大金持ちになつてしまつたのであります。だんぶりといふのは、奧州の言葉で蜻蛉のことであります。蜻蛉に敎へてもらつて長者になつたから、それで名前を蜻蛉長者と呼ぶことになりました(陸中鹿角郡)。

藁しべ長者

大昔貧乏で貧乏でなんともかともしようない人がありました。大和の長谷の觀音樣に參つて來まして、どうか御助け下さいと朝から晩まで晩から朝まで、幾日も幾日も一しょう懸命になつて拜んでをりました。さうすると或夜の夜明け方に、誠に不思議な夢を見ました。觀世音が御堂の奧の方から出て御出でになつて、其方は前の生の行ひが惡かつたので、今の此世で報いを受けてゐるといふことも知らずに、いつ迄も其樣に禱つてゐるのは

愚かなことだ。其方に授ける福は何一つとてないが、あまり不便だからほんの少しだけの物を遣はすぞ。是から下向の路で何によらず、最初に手の内に入つたものを、賜はり物と思つて持つて歸れといふことでありました。男は其夢を觀音樣の御告げと心得まして、もうあきらめて次の日は京都の方へ還ることにしました。ところが長谷の御寺の大門を出ようとするときに、どうした拍子でか、つまづいて轉びました。起き上つて氣が付いて見ますと、知らぬ間に自分の手に、一本の藁しべを摑んでをりました。それでは是があの夢の御告げの、觀音樣の賜はり物であつたのか。心細いことだと思ひましたけれども、根が信心深い男ですから、其藁しべを大切にして持つて出て來ました。

春の半の暖かい日であつたさうです。途中で一匹の虻が飛んで來て、顏のあたりをうるさく飛びまはりました。木の小枝を折つて逐ひますけれども、直ぐに又飛んで來てたかります。おしまひには其虻を手で捕へまして、ちようど持つてゐた藁しべでそれを縛つて、その小枝に結び付けました。虻はぶん〳〵と縛られたまゝで、枝のさきで飛びました。そこ

藁しべ長者

へちょうど京都の方から、きれいな牛車に乘り數多の家來を連れて、長谷に參詣する人が來ました。車の中には小さな男の子と、其子の母親とが乘つて外を見てゐました。子どもは牛車の簾の中から、此男の手に持つ虻を見つけて、あれが欲しい欲しいと言ひました。さうすると馬に乘つた一人の家來が、急いで貧乏人のそばへ遣つて來て、若樣がその虻を欲しいと仰せられる。なんとそれを差し上げてはくれまいかと申しました。これは只今觀音樣からいたゞいて來た藁ですが、御子さまが御望みとありますれば、差し上げませうと言つて渡しますと、車の中の奥方は大そうな御喜びで、咽が乾いたらうからお食べと、見事な蜜柑を三つ、眞白な紙を包んで此男に下さいました。

僅か爰まであるいて來るうちに、もう藁しべ一本がこんな見事な蜜柑になつた。御利益は有り難いと思ひまして、又それを大事にして手に持つて歸つて來ると、今度は路の脇に二三人の從者をつれて、休んでゐる若い女の人がありました。暑くて咽が乾いてどうしてもうあるくことが出來ない。何處か此邊に水はなからうかと此男に尋ねましたが、近く

には井戸も流れもありませんでした。あんまり苦しくて氣が遠くなるほど、若い女の主人が水を欲しがるので、家來たちも困つてしまひました。それならば茲にたつた今京都の奥樣から下さつた蜜柑があります。是を差し上げて御覽になつてはいかゞと言ひますと、女の人は大喜びで、早速それを貰つて食べました。あゝ此人が來て蜜柑をくれなかつたら、私は長谷の觀音樣へ御參りも出來ずに、道中で死んでしまつてゐたかも知れない。何か御禮をしなければならぬのだが、旅のことだから他には何も上げるものがない。まゝ何か食べて下さいと、用意の御辨當を出して、そこで十分に食事をさせました。それから別れて歸らうとしますと、是はほんの心ざしばかりと言つて、荷物の中から好い布を三反出して此男にくれました。

その三反の布を脇にかゝへて、男は喜び勇んで又路をあるいてゐるうちにだん〳〵日の暮れに近くなりましたが、むかうの方から立派な馬に乘つた一人の武士が、家來を引き連れて急いで來ました。なんと良い馬もあるものだなと見てをりますと、不意に其馬が此男

の立つてゐる前まで來て、ばたりと倒れました。是は困つたことになつた。今までなんともなかつた馬が死んでしまつた。仕方がないから後に殘つてなんとか始末してくれと家來に言ひつけて置いて、主人の武士は大急ぎで先へ行きました。此武士も家來も遠方から來た人で、どうすることも出來ないで弱りきつて、家來たちは倒れた馬の傍に、しゃがんで評議をしてをりました。それでは其馬は私が引き受けて片づけましようと、貧乏人は其家來たちに言ひました。さうして只で貰ふのも御氣の毒だから、之を上げますとさきの三反の布の中から、一反だけ出して遣りますと、家來たちは顔を見合せて安心したやうな樣子をして、其布を持つて急いで主人の後を追うて行つてしまひました。觀音樣の御慈悲は爭はれない。一日のうちに藁しべが蜜柑三つになり、その蜜柑が三反の布になり、布は又こんな良い馬になつた。どうか出來ますならば此馬を、今一度活き返らせて下され觀音樣と、信心を凝らして念じてゐるうちに、馬が目を開けて小しづつ動き出しました。大喜びで口を取つて引き立てると、馬は立ち上つて身ぶるひをしてあるき始めました。人に見られる

と盜んだと思はれるかも知らぬと思つて、林の陰につれて來て、樹に繫いで休ませました。さうして夜に入つて後に村里に行つて、殘りの二反の布で麥と秣、それから粗末な馬具などを農家から讓つて貰つて來ました。それで十分な支度をして、夜中になつてから其馬に乘つて、林の陰を出て來ました。

京都に還つて來たのは、次の日の朝早くでありました。京都の町の入り口に一軒の大きな家があつて、今日遠方に引っ越しをする樣子で、荷物をくゝつたり人を喚んだり、家內中大騷ぎをしてゐました。こんな時にはよく馬の入用があるものだ。もしかすると買ふかも知れぬと思つて、門口に立つて馬を御求めになりませんかと申しました。さうすると主人が出て來て、是は如何にも好い馬だ。ちようど是くらゐの乘り馬を一頭、買ひ入れたいと思つてゐたのだが、旅に出る矢先で代物に不自由をする。なんとこの近くに少しばかりの田があるが、それを此馬の代りに取つて作つてくれぬか。それから此家も留守のうちは住む者がない。預けて置くから私たちの歸つて來るまで、入つて自由に住んでゐてよろしい

と言ひます。それで承知をして馬を渡しますと、喜んでそれに乗つて、其日のうちに家の人たちは、遠い關東へ旅立つてしまひました。

虻の男は其跡に住んで、讓り受けた田を耕し、忽ちに立派な農家になり、一年ましに暮しが安樂になりました。元の家主は其後何か事情があつたと見えて、幾年經つても歸つて來ませんでした。それで自然にこの大きな家が自分の物となり、永く子孫が繁昌して、大和の長谷の觀世音の御利益を、感謝したといふ話であります。

炭燒小五郎

昔々、豐後國の有名な眞野長者は、元は炭燒小五郎といふ貧しいよく働く青年でありました。三重の內山といふ所に小屋を建てゝ、一人で炭を燒いて暮してをりました。この小五郎の小さな寂しい炭燒き小屋へ、都から美しい御姫樣が、尋ねて下つて來られました。

私は京の清水の觀音樣の御告げを受けて、あなたの家へ御嫁に來た者です。今日から此小屋に置いて下さいと言ひました。折角遠い都から遙々と嫁に來て下さつたのは嬉しいけれども、此小屋には今晩二人で食べるだけの、御米さへもありませんと言ひますと、それならば町へ出てその御米を買うて來て下さいと、御姫樣は錦の袋の中から、二枚の小判を出して炭燒小五郎に渡しました。小五郎はその黃金を手に持つて、山を降りて町へ食べ物を求めに行きました。內山の麓には谷川が流れてゐます。其岸には川楊の林が茂つて、その陰が靜かな淵になつてゐました。林の中の路を小五郎が通つてゐますと、二羽のをし鳥が其淵の上に遊んでをりました。小五郎はそれを見かけて立ち止まつて、手に持つ二つの小判を礫にして、其鳥を打ちました。よく狙つて打つたのですが、をし鳥は飛んで逃げ、小判は水の底に二つとも沈んでしまひました。それで仕方がないので又山の小屋へ戻つて來ました。今途中で水鳥を見つけたから、捕つて來て上げようと思つたが、中らなかつたと申しました。

花嫁はそれを聞いてびっくりしました。あれは大切な此世の寶で小判といふものであります。あれだけあれば澤山の米や魚鳥が買へるのに、惜しいことをなされましたと言ひました。さうすると炭燒き小五郎も始めて知つて、大へんに驚きました。あの石がそんなに貴い此世の寶だとは少しも知らなかつた。それならばこの小屋の後の山の中に、幾らでもあの色をした小石が轉がつてゐると言つて、早速二人で松明をつけて見に行きますと、果して小五郎の話した通り、一谷の小石はことゞく純金でありました。それを拾つて來て小屋の中に運び入れますと、忽ち炭燒き小屋が一ぱいになつたので、其殘りは小屋の外に積み上げて置きました。町や里の人たちは其事を聞いて、我も我もと色々の物を賣りに來ました。さうして黄金を分けてもらふ爲に、皆が小五郎夫婦の爲に働いてくれました。そこで三重の內山には大きな屋敷を開き、又觀音の御堂を建てゝ信心しました。奥州のだんぶり長者と同じように、玉のようなきれいな姫が生れて、後に都に上つて御妃になり、家はます〳〵榮えました。元が炭燒きであつたから、それで炭燒き長者と人がいひました。

二十騎が原

むかし甲州の西山に、家富み榮えた一人の長者がありました。澤山の田や畠を家來に作らせ、又廣い林や野を持つてゐて、狩りなどをして日を送つてゐました。長者夫婦には十人の男の子がありました。それが皆大きくなつて、いづれも立派な逞しい若者になりました。或日その十人の兄弟は、野原に出て弓を射て仲よく遊びました。長者の夫婦もつれ立つて出て來まして、高い棧敷をかけさせて其上に坐つて見物をしてゐました。若い人たちは華やかな晴れ衣を着て、鹿毛や栗毛や黑や月毛や、色々の馬に乘つて出て來ました。さうして自由自在に野原を馳せまはつて、おの〳〵精一ぱい弓の技を、親たちに見せました。

長者はこの有り樣を見て大へんに喜んで、傍に添うてゐる自分の妻に話しかけました。十人の子寶は決して少ないと言はれない。しかし若し此上に尙十人の男の子があつて、そ

れが共々にかうして同じ野で、弓を射て遊ぶのであつたら、どんなに心丈夫で又樂しいことであらうと申しました。さうすると長者の女房は之を聽いて、それならば本當の事を打ちあけませう。本當はこの子どもの生れる時に、どれもこれも双子で生れたのでありました。餘り多いと思つて遠慮をして、實は今まで別の所で育てゝ置いたのです。直ぐに喚びに遣りますから會つて下さいと言つて、大急ぎで使ひを走らせました。暫く待つてゐると此野の向うの端から、若い武士が又十人、是も皆良い馬に乘り、花のように色々に染めた狩衣を著て、前を負ひ弓を手に持つて現れて來ました。さうして長者の前に來て禮拜をしました。どれもこれも男らしく、りゝしい若者ばかりでありました。それが前の十人の兄弟と入り交つて、この廣い野原を縱横に馬を走らせ弓を射て、日の暮れるまで面白く遊んださうであります。

其長者の家は、長い間にもうなくなつてしまひました。さうして其家の跡が山になり野になりました。然し長者の二十人の子どもが、毎度連れ立つて出て遊んだといふ野原は、

二十騎が原と謂つて、久しい後まで名が殘つてゐました。それから少し離れた小山の麓には、又赤子澤といふ所もありました。長者の妻が家を建てゝ、その十人の双子の片方を育てゝゐた谷だから、それで赤子澤といふのだと話す人もありました。

長者の寶競べ

むかし肥後の菊池の米原の長者と、山本郡の駄原の長者とが、寶物くらべをしたことがあるさうであります。米原の長者は自分の住む米原の村から、山鹿の茂賀浦の阪口といふ所まで、田底三里の間に黃金の飛び石を敷いて、それを踏んで出て來ました。駄原長者は何一つの持ち物もなく、男の子二十四人を引き連れて出て來ました。米原の長者には子といふものが一人も有りませぬ故に、之を見てうらやましいと申しました。それから後はその阪を、今に浦山の阪といふことになつたさうであります。

會津の鶴塚

昔奥州の會津に、常安といふ長者がありました。この長者も何百と算へることも出來ない倉を持ち、其倉に一ぱいの金銀と米、其他色々の寶物を貯へてをりましたけれども、子といふものが一人もなくて、それを遣つて喜ばせることが出來ませんでした。あんまり寂しくて仕方がないので、鶴を飼つて子供のやうに可愛がつてをりました。鶴は長生をする鳥だから、永く長者の跡が殘るだらうと思つて、それを子供の代りに育てゝをりました。ところがどういふわけか其鶴がまた死んでしまひました。長者夫婦は非常に力を落して、鶴の爲に大きな塚を築きました。それが鶴塚と謂つて今でも殘つてをります。さうして長者の家の跡は、もう何處だかわからなくなつてしまひました。

湖山の池

昔々、因幡國の湖山長者は、一千町歩の田を持つた大きな地主でありました。毎年五月の田植ゑの日は、何千人といふ田人早少女を使つて、一日の中にその千町の田を植ゑてしまふのが、長者の家の昔からの習はしになつてをりました。ところが或年の田植ゑの日に珍らしい事が起つて、どうしても晩方までに千町歩を、植ゑてしまふことがむづかしくなりました。その珍らしい事といふのは、ざっと先づこんな話であります。

其日も毎年の通り朝早くから、若い田植ゑの女たちが田に下りて、いつもの佳い聲で田植ゑ歌をうたひ、面白く田を植ゑてをりますと、どこの山から出て來たものか、一匹の大きな牝猿が、子猿を背に逆さまに負うて、その廣い水田の畔を通つて行きました。何百人の苗持ち男、何千人の早少女たちは一時にふりかへつて、この不思議な猿の親子の姿を見

ました。ほんの僅かばかりの間、立つて見てゐたのでありますが、なんにせよ是だけ大勢の働く人が、殘らず手を休め腰を伸ばしたのですから、爲事がその爲に大へんにおくれてしまひました。太陽がもう西の山の嶺に近くなつても、まだ廣々とした水田の面が、白く光つて殘つてゐます。明るいうちに植ゑ盡すことがなんとしても出來ないといふことになりました。

湖山長者は高い所から、此樣子を見てゐまして、おれの家ではいつの田植ゑにも、昔から此田を一日に植ゑ切らなかつたことは一度もない。今年ぼかり千町歩の田植ゑに、二日かゝつたとあつては長者の名折れだ。若しも思ふことが何事でも、心のまゝに成るのが長者であるならば、今日は此日の暮れて行くのを、是非とも止めねばならぬと言つて、黄金を張つた扇を一ぱいに開いて、夕日に向つて戻れ〳〵と、三べんまで招き返しました。さうすると果して長者の思ひ通り、山に沈みかゝつた日輪が竿三本の長さだけ、三べんに戻つて來ました。千町歩の田植ゑは其光の下で、此日も滯りなくすませましたさうです。併し此

樣な事をして自ら長者の威勢を試みるのは、勿體ないことでありましたから、忽ちに其天罰を受けました。長者の幸運は此時を絶頂として、それから次第に降り阪に向ひました。今では子孫が悉く死に絶えて、何處に長者の家が在つたかも、もはや尋ねて見ることが出來なくなりました。或は大地震があつて潰れたとも謂ひますが、その千町歩の長者の田は、いつの間にか大きな湖水になつてをります。汽車の窓からよく見える、湖山の池といふ廣い美しい水海は、むかし湖山の長者が入り日を招き返した、田の跡だと言ひ傳へられてをるのであります(因幡氣高郡)。

梅木屋敷

むかし奥州の滑志田村に、助右衞門といふ又一人の長者がありました。此長者の家では親代々の言ひ傳へがあつて、いかに貧乏して家屋敷を賣ることがあつても、庭前の梅の樹

だけは賣つてはならぬ。必ず掘り起してどこかへ持つて行つて植ゑるようにと、堅い戒めになつてをりました。ところがよもや貧乏になることはあるまいと思はれた助右衞門の家が、だん〳〵微祿をして、どうしても屋敷を賣らなければならぬことになつた時、それでも主人は先祖の教訓を忘れないで、老いたる梅の樹を掘り起して、隣の小屋敷に移さうとしました。さうすると不意にかちりと鍬の尖に、大きな古甕が掘り當つて、蓋を取りのけてると其中から、大判といふ黄金が山のやうに出て來ました。家の人たちは大喜びで、直ぐに其金を出して借りた金を返し、屋敷を賣らずに濟んだばかりか、前よりも一層立派な家を建てゝ、元の長者となつて繁昌することになりました。ところが困つたことにはこの助右衞門の屋敷には、まだ何本となく老木の梅がありました。さうして其樹の下から黄金の甕の出た話を、子孫の者がよく覺えてゐて、安心して奢つた暮しをしました故に、暫く經つと又貧乏になりかけたのであります。それで大急ぎに別の梅の木の根もとを、一本一本と掘つて見ましたけれども、今度はどれからも大判は出て來ませんでした。さうしてしまひには家も梅の樹も悉くなくなつて、今ではその屋敷の跡だといふ只の大きな畠を、いつ迄も人が梅木屋敷と呼んでゐるだけになつたといふ話であります。

本取山

昔々、越中礪波郡の山奥に、いくら深いとも知れぬ洞穴がありました。山の麓の村に住む人たちは、いつでも此岩屋の穴の口に來て、家で入用なお膳だのお椀だのを、借りて來ることにしてゐたさうであります。たとへば明日は御客があつて、うちの道具だけでは間に合はぬといふ時には、前の晩に此穴へやつて來て頼みました。私は村の何左衞門でございます。あすは是々のことで客をいたしますのに、膳椀の數が足りませぬ。どうぞ十人前だけ御貸しなされて下されと言つて、還つて次の日の朝早く又行つて見ますと、必ず立派な器が頼んで置いた數だけ、揃へて穴の口に出してあつたものだそうです。それを使つ

た後でよく洗つて拭いて、次の日に同じ所へ持つて來て、有り難うございましたと御禮を述べて戻ると、何時の間にかそれがしまひ込まれたといふことで、誰が貸してくれるものか、見たといふ者は一人もありませんでした。

赤や青色の漆塗りの、誠に美しい膳椀であつたさうであります。ところがある慾の深い人が之を借りて來まして、あまり欲しいのでもう返さぬつもりになりました。催促をしに來る者のないことを知つてゐましたから、平氣でいつ迄もそれを使つてをりました。それから岩屋の穴の口では、もはやなんと御願ひしても、決して道具類を貸してくれぬやうになつたのは、當然のことでありました。しかしその不正直な百姓には、別になんの罰もありませんでした。さうして夫婦で働いて、少しづつ家が金持ちになつて來たばかりでなく、その夫婦が子どものないのを寂しがつてゐたところが、そのうちに一人の男の子さへ生れて、大悦びをしました。

たゞ困つたことには折角生れた一人子が、五つになつても六つになつても、まだ起つて

あるくことが出來ません。今に立つだらうと言つて待つうちに、とう〳〵十の歳になりました。秋の稲刈りがすんで、それを持ちこんで家の表の庭で、夫婦はせっせと籾を扱いて、俵につめてをりますと、今まで足の立たなかつた男の子が、家の中から匍ひ出して來まして、そこいらを遊びまはつてをりましたが、其うちにふいと庭先に轉がしてあつた二つの俵の中に入つて、兩方の手に俵をつかまへて、始めて其子が立ち上がりました。あゝ立つたと手を打つて、二人の親が大喜びで見てゐたところが、男の子は其俵を兩方の手に持つたまゝで、なんと、今までに立つことすらも出來なかつた者が、すたこらとあるき出したではありませんか。

夫婦も始めはたゞ不思議に思つて見てゐたのですが、あんまり急に足が達者になつて、俵を下げたまゝで屋敷から外へ出て行きますので、びっくりして其後を追ひかけました。しかし足が早くてどうしても追ひ付くことが出來ません。さうして見てゐる間に段々と遠く山路を登つて行つて、おしまひに以前お膳お椀を貸してくれた岩屋の中へ、ずん〳〵と入

つて行つてしまひました。父親も大いそぎで後から其穴の口まで遣つて來て覗いて見ましたが、中は眞暗で何物も見えず、又怖ろしくて入つて見ることが出來ませんでした。仕方がないのでぼんやりしてそこに立つてをりましたら、穴の奥の奥の方で、話をする聲が聞えました。やっと米を二俵だけ持つて來た。是でまあ本だけは取れたと、誰かゞ大きな聲で言ふのが聞えたさうであります。

このお話は是でおしまひです。それから此岩屋のある山の名を、本取り山といふようになつたのだと言つてをります。

姫　鶯

鶯姫

昔々駿河國に、一人の爺がありました。山で竹を伐つて來て色々の器を作り、それを賣つて渡世にしてゐたので、竹取りの翁と謂ひ、又箕作りの翁とも古い本には書いてあります。この箕作りの翁は或日竹林に入つて、鶯の卵が巣の中でたゞ一つ殊に光りかゞやいてゐるのを見つけました。それを大切に家に持つて來て置きますと、おのづと殼が割れて其中から誠に小さな美しい御姫樣が生れました。鶯の卵から生れた故に鶯姫と名を付けて、自分の子にして育てました。だん〳〵に大きくなつて、後には又とないやうな綺麗な御姫樣になり、光り耀く故に又かぐや姫とも呼ばれました。箕作りの翁の伐つて來る竹の節の中には、いつでも黄金が一ぱい詰まつてゐるやうになつて、元は貧乏であつた老人が、僅かのうちに大そうな長者になつてしまひました。其長者の美しい姫のところへ、聟

になりたいと言つて色々の人が尋ねて來ましたが、いつも長者の親子からむつかしい問ひをかけられて、それが答へられないので困つて歸つて行きました。時の天子樣はかぐや姫の光りかゞやくやうな美人であることを御聞きになつて、狩りの御遊びの序を以て駿河國まで姫を見に御出でになりました。さうして都に上つて御妃になるやうに、御勸めになりましたけれども、思ふ所があつて是をさへ御辭退申し上げました。その年の秋の八月十五夜に、月の光が清らかに、空一ぱいに照り渡つてゐる時、眞白な雲が迎へに來まして、かぐや姫親子は富士の山の上から、天へ上つて行つてしまつたさうであります。其折にこの一首の歌を添へて、死なぬ藥といふものを天子樣にさし上げました。

今はとて天の羽衣著る時ぞ君をあはれと思ひ出でぬる

天子樣は此和歌を御覽になつて、大そう御悲しみなされたといふことであります。さうして死なぬ藥にも用はないと仰せられて、天に最も近い富士の山の上に持つて行つて、それを燒いてしまふやうに命ぜられました。それから久しい後まで、富士の煙と謂つて、常に

此山の頂上が燃えてゐたのは、其藥を燒き棄てた煙が、永く殘つてゐるのだと言ひ傳へてゐたさうであります。

瓜子姫

むかし〳〵爺と婆とがありました。爺は山に行つて薪を伐り、婆は川に行つて洗濯をしました。或日いつものやうに婆が川へ行くと、川上の方から瓜が一つ流れて來ました。それを拾つて來て爺と二人で割つて見ると、其中から誠に小さな、美しい女の子が生れました。瓜の中から生れたので、瓜子姫と名を付けて可愛がつて育てました。だん〴〵に大きくなつて、後には好い娘になつて毎日々々機を織りました。今年の鎭守樣の御祭りには、瓜子を御參りに連れて行かうと思つて、爺と婆とは御駕籠を買ひに、二人で町へ出かけました。留守にはぴったりと戸を締めて、中で瓜子姫が機を織つてゐますと、あまのじゃく

が遣つて來て作り聲をして、此戸を少しだけ開けてくれと言ひました。瓜子はついうっかりと戸を細目に開けてやると、それから怖ろしい手を入れて、あまのじゃくが戸をがらりと開けました。裏の柿の實を取つて上げましょう瓜子さんと言つて、瓜子を裏の畑へ連れて出て、裸にして柿の樹へ縛りつけました。さうしてあまのじゃくが瓜子の著物を著て、化けて知らぬ顏をして機を織つてゐます。そこへ爺と婆とは駕籠を買うて、町から歸つて來ました。さぁさぁ瓜子姫、御駕籠を召せと言つて、あまのじゃくを駕籠に乘せて鎭守樣へ詣らうとしてゐると、裏の柿の樹の陰から本當の瓜子姫が、瓜子を乘せないでよう〳〵、あまのじゃくばかり駕籠に乘せてよう〳〵と、大きな聲で啼きました。爺と婆とは其聲を聽いて、びっくりして引き返して來て、それから爺は鎌をふり上げてあまのじゃくの首を切つて、黍の畑に棄てゝしまひました。黍の莖が秋赤くなるのは、其あまのじゃくの血が染まつたからださうです(出雲)。

米嚢粟嚢

むかし〳〵或所に、姉と妹と二人の娘がありました。姉の名は米嚢で亡くなつた母の子、妹の名は粟嚢で今の母の子でありました。繼母はいつも姉の米嚢を憎んでいぢめてゐました。或日村の娘たちと一しょに、二人は山に栗を拾ひに行くのに、姉には底の腐つた古叺を持たせ、妹の粟嚢には新らしいこだすを持たせて遣りました。もう夕方になつて、どの娘も粟を一ぱい拾つたからさあ歸らうと言ひましたが、米嚢の叺だけは底が拔けてゐるので、いつ迄も一ぱいになりません。それで友だちが皆歸つてしまつて一人だけ山の中に殘されました。腹がすいて仕樣がないので、谷に下りて水を飲んでゐますと、白い美しい一羽の小鳥が飛んで來ました。可愛いゝ娘、私はもとはおまへの母親であつた。おまへはおとなしくて今のお母さんによく仕へてゐる。其御褒美には此小袖を上げる。常に

は土の中に隱して置いて、事のある時には出して晴れ著に著るがよいと言つて、それに葵の笛と新しいこだすとを副へて、米嚢に與へました。新しいこだすを貰つたので、栗の實がすぐに一ぱいになりました。それを背負つて晩に家へ戻つて來ました。

それから又四五日して、隣の村に御祭りがありました。繼母は粟嚢に好い著物を著せて、其御祭りを見に出かけて行きます。姉の米嚢も行つて見たいと言ふと、お前は麻絲を三結び績んで、それが濟んだなら來てもよいと言ひました。それで一しょう懸命に苧を績んでゐますと、友だちが大勢で誘ひに來ました。私は此爲事を母に言ひつけられたから行かれぬといふと、友だちが哀れに思つて手傳つてくれましたので、思ひの外に早く爲事が片付きました。それから白い小鳥に貰つた小袖を出して來て、きれいになつて皆と出かけました。途々あるきながら葵の笛を吹いて見ると、

この笛を聽く者は
天飛ぶ鳥は羽をよどめて聽け

地を匍ふ蟲は足をよどめて聽け

と、いふ聲に響いたさうであります。

隣り村の御宮に詣つて見ますと、妹の粟囊は母と一しょに、人形の舞ひを見てゐました。姉の米囊は饅頭の皮を、そっと妹に投げ付けて見ると、頰に當りました。あれ姉さんがあそこから、私に饅頭の皮を投げたといふと、いや〳〵米囊には用が言ひつけてある。なんで今頃來るものかと言つて、母親は本當にしません。それから又少し經つて、妹があちらを向いてゐる時に、今度は飴の包みの竹の皮を投げて見ました。それも妹がさう言つても母親は信じません。それは誰か似た人でゞもあるだらう。人に物を投げられたら脇を向いてゐろと言ひました。

そのうちに母と妹がもう還りさうにするので、米囊は急いで先に戻つて來て、著物を著替へて知らぬ顏をして待つてゐました。其次の日には隣村の人から、米囊を嫁に欲しいと言つて來ました。繼母は妹の方を貰つてくれと言ひますので、それならば二人のきり

よう比べをして、美しい方にきめようといふことになりました。二人が御化粧をするのに髪には何をつけようかと妹がきくと、棚から油を持つて來て塗つて見ろと敎へ、姉が問ふと水屋の流し元の水でも附けろといひました。粟囊の髪は癖毛だから、櫛に引掛つてぴんぱら〳〵と鳴りましたが、それを母親は琴か三味線かの音のやうだと言つて賞め、米囊の髪の毛がすなほで澤山あつて、櫛が通つてじょらじょらとするのを、まるで糞蛇が穴に入つて行くやうな音だとけなしました。それでも髪を結つてしまひますと、誰が見ても姉の方が遙かに美しいので、とう〳〵嫁に貰はれて行つてしまひました。妹の粟囊はそれを見て羨しくてたまりません。私も早くあのやうな立派な駕籠に乘つて、嫁入りがして見たいと言つて母親をせがみました。母親は仕方がないので荷車に妹を載せて、嫁はいらぬか嫁はいらぬかと、大聲に觸れてあるくうちに、其車が轉げて、娘は田に落ちて田螺になり、惡い繼母は堰に棄ちて、堰貝になつてしまつたさうであります(津輕七つ石)。

山姥の寶蓑

むかし〳〵或山國の田舍に、美しい一人の娘がありました。春の日に村の人たちと山へ遊びに行つて、路をまちがへて自分だけ、遠くの方へ行つてしまつて、歸ることが出來なくなりました。其うちに段々日が暮れて來て、どつちへ行くのがよいかと思つて困つてをりますと、向うにたつた一つ燈火が見えるので、大喜びで尋ねて行きましたら、それが山姥の家で、山姥が一人で圍爐裏に當つてゐました。折角尋ねて來たけれども、爰は人を食ふ者の住居だから泊めてやることは出來ぬ、竝の人間の家を探す方がよいと言ひました。娘はこれを聽いてぞつとしましたが、もう食べられても構ひませんからどうか泊めて下さい。どうせ今夜のやうな暗い晩に、是から山の中をあるいてゐれば、熊か狼かに食べられるにきまつてをります。それよりも爰で食べられた方がまだよいからと言ひました。

山姥もそれを聞いて哀れに思ひました。それでは大事な私の寶物だけれども、寶蓑といふ物をお前に上げるから、是を被つてもつと先へ行くがよい。この蓑を著て三遍如法の唱へ言をすると、老人にでも子供にでも、自分の思つた通りの者の姿になれる。又欲しいと思ふ物は此蓑を持つて振ると、なんでも出て來るからと言つて、きれいな一枚の蓑をくれて、使ひ方を教へてくれました。娘は喜んで其蓑を貰つて、早速よぼ〳〵のお婆さんの姿になつて、山姥の家から出て來ました。途中には怖ろしい鬼が集まつて、待ち伏せをしてゐる所もありました。あれ人が通る。取つて食はうかといふ鬼があると、よせ〳〵あんなきたない痩せた婆あを食つてもつまらないと他の鬼どもが止めました。さうして漸く夜の明ける頃に、知らぬ里に出て來て、ある長者の門の前に立ちました。私は行く所もない者です。どこの隅にでもよいから置いて下さいと言ふと、情深い長者で、それでは長屋の空いてをる所にゐるがよいと言つてくれました。

それから其長屋にゐて、晝は絲紡ぎなどをして暮し、夜は退屈なものだから、誰も知ら

ぬ間だけそっと元の娘になつて、手習ひなどをしてをりました。長者の息子が或晩遅くなつて外に出て見ますと、長屋にたつた一つ燈し火の光がさして、覗いて見ると美しい娘が一人靜かに手習ひをしてゐます。どうかあの娘を嫁に欲しいものだと思つて、次の日屋敷中を探して見ましたけれども、もうそんな女は何處にもをりません。不思議なこともあるものだと思つてゐると、今度は家の下男がどうかして其姿を見つけまして、化け物かも知れぬと思つて、其事を長者どのに話しました。それで早速この婆を呼んで來て、段々證據を出して責めて見ますと、娘はもう仕方がないので、山姥に貰つて來た寶蓑の話をしました。さうして其蓑を脱いで娘の姿に戻つて、自分の家と所を詳しく言つて、どうか私の家へ屈けて下さいと頼みました。長者の力で探して見ると、娘の家はやがてわかりました。家ではもう死んだ者と思つて、御祭りをしてゐたさうであります。それを送り返してやると、大騒ぎをして喜びました。それから暫くして其娘を、長者の家の嫁にもらふことになつて。一家仲よく皆榮えたさうであります。めでたし〳〵（甲斐）。

竈神の起り

昔々或村に一人の百姓がありました。旅から歸つて來る途中で、夜に入つて俄雨が降つて來たので、暫く路傍の道祖神の森の陰に、雨宿りをしてをりました。さうすると其森の前を馬に乘つて行く人があつて、暗い所から聲をかけました。道祖神は御宿ですか、今夜は何村に御産が二つあります。是から御一しょに生れ子の運をきめに參りましようと言ひました。森の中から又返事をして、折角御誘ひ下さつたけれども、今はちようど雨宿りの客があつて、手が離せませんからよろしく願ひます。左樣ならば一人で行つて來ますと言つて、馬の足音が遠くなりました。何村といふのは自分の所のことですから、是は不思議なことだと氣を付けてをりますと、僅かばかりの後に其馬の主は歸つて來て、又表の往來から聲をかけて行きました。本家の方は男の子、分家の方は女の子、女は福分があつて男

は運がありません。是を夫婦にすれば女房の運で榮えるでしようと言ひました。

百姓は思ひがけず、今日の赤子の運定めの話を立ち聽きしまして、急いで村に歸つて見ますと、ちようど自分の家に男の子が生れ、隣りの分家では女の子が生れてゐましたので、すつかり驚いてしまひました。それで早速に相談をして隣りどうしで今から緣組の約束をしました。二人が大きくなつて夫婦になりますと、成程家は段々に繁昌しましたが、それを女房の運がよい御蔭だと、思つてゐることは亭主には出來ませんでした。後には追追と氣に入らぬことばかり多くなつたので、赤飯を炊いて赤牛にゆはへつけ、その赤牛に女房を載せて、强ひて遠くの野原へ追ひ放してしまつたさうであります。

女房は泣きながら其赤牛に乘つて、何處へでも牛の行くなりに任せてをりますと、段々と山に入つて山中の一軒家の前に來て止まりました。其家の主人は親切な男で、色々と世話をしてくれますので、他に行く所もないから、とう〳〵其一軒家の嫁になりました。さうすると見てゐるうちに此家の暮しが都合よくなつて來ました。後には數多の男女を使つて

何不自由のない身分になりました。其ちようど同じ頃から、女房を追ひ出した本家の方では、損をするやうな事ばかり續いて、次第に身上が左前になり、しまひには親代々の田畠までなくして、零落して笊賣りになつてしまひました。其笊賣りがそちこちを賣りあるいてゐるうちに、或時ひよつこり山の中の、立派な一軒家に遣つて來て、持つてゐた笊を殘らず買つて貰ひました。

それから後も他へ往つては少しも賣れないので、毎日のやうにこの山中の一軒家に來て賴んで笊を買つて貰ふことにしてゐましたが、或日其家のおかみさんがつく〴〵と笊賣りの顏を見てゐて、どうしてお前さんはそのやうに落ちぶれたか。元の女房も見忘れてしまつたかと言ふので、始めて氣が付いて見ると、成程前の年赤牛に乘せて追ひ出してしまつた自分の妻であつたので、びつくり仰天して泡を吹いて死んでしまつたさうであります。

女房はそれを見て可哀さうに思ひました。さうして誰も知らぬうちに、そつと其死骸を竈の後の土間に埋めて、自身で牡丹餅をこしらへて供へました。其日外に出てゐた家の人

たち下女下男などが歸つて來ますと、今日は竈の後に荒神樣を祀つて、其御祝ひに牡丹餅をこしらへたから、幾らでも食べるやうにと言ひました。それが始まりで今でも百姓の家では、牡丹餅をこしらへて竈の神の御祭りをするのださうであります(上總長生郡)。

矢村の彌助

むかし信州に矢村の彌助といふ親孝行の、若い農民がありました。正直でよく働いて、それでゐて家は貧乏でありました。或年の暮れに僅かな錢を持つて、正月支度の買ひ物に暮の市へ出かける途で、路傍のわなに一羽の山鳥がかゝつて、ばた〳〵としてゐるのを見かけました。是は一つ助けてやらうと、絹の絲を弛めて山鳥を逃がしましたが、たゞ逃がしては絹の主に濟まぬと思つて、手に持つてゐた一緡の錢を、山鳥の代りに其跡へ挾んで置いて、もう買ひ物の用がなくなつたから、手を空にして戻つて來ました。家の母親も心

のやさしい人で、それは好い事をして來たと言つて、親子二人で何もない寂しい正月をしました。そこへ見馴れない若い娘が一人訪ねて來ます。私は旅の者、雪に降られて難儀をします。なんでも働きますから春になるまで置いて下さいと謂つて、お婆さんの代りに色色の家の用をしてくれました。至つておとなしいきれいな娘でありました。親も身寄りもない人ならば、いつそ此家にゐて嫁になつてくれぬかと、彌助の母親が相談をかけて見ましたら、喜んで承知をして嫁になりました。それから何年か仲よく暮してゐるうちに、有明山に惡い鬼が現れて、田村將軍が朝廷の仰せを蒙り、それを退治に行くことになりました。矢村の彌助は弓が上手だから、田村將軍の御供をして、鬼征伐に出なければなりません。其時に彌助の女房がそつと彌助を呼んで、斯ういふことを申しました。有明山の鬼は魏死鬼と謂つて、たゞの弓箭ではとても射殪すことが出來ません。十三の節ある山鳥の尾羽根を箭に矧いで、其箭で射るならば一矢でも退治することが出來ます。一世一代の男の大事だから、其羽根を私が上げましよう。私はずつと昔の年の暮に、わなにかゝつてゐな

たに命を助けられた山鳥ですと言つて、泣きながら何處へか飛んで行きました。後には十三節の見事な山鳥の尾羽根が殘してありました。それだから有明山の鬼が退治せられて、日本アルプスが明るい山になつたのも、全くこの矢村の彌助の手柄であります。彌助は其手柄によつて莫大な御褒美を頂き、永く信州の山奥に其名を留めました(信濃南安曇郡)。

狐女房

むかし能登國の萬行の三郎兵衞といふ人は、或晩便所に行つて歸つて來て見ると、部屋に自分の女房が二人をりました。どちらか一人は化け物に相違ないのですが、姿から言ふことまでも寸分の違ひがなく、色々難題をかけて見ましたが、双方共にすら〳〵と答へるので、どうすればよいのかに困つてしまひました。そのうちに一人の方に、ほんの僅かな疑ひがあつたので、それを追ひ出してしまつて今一人の方を家に置きました。それから家

が繁昌して二人まで男の子が生れました。その二人の子が少し大きくなつて家で隱れんぼをして遊んでゐて、ふと母親に尻尾のあることを見つけました。正體を見られたからにはもうをることが出來ない。實は私は狐であつたと言つて、二人の子を殘して泣いて歸つて行きました。それから毎年稻の稔る頃になると、其狐の女房は三郎兵衞の田のまはりを、『穗に出いでつつぱらめ』と唱へながらあるいたさうであります。さうして此家の稻だけは、いつも少しも實が入らぬ爲に、毛見の役人が見に來て必ず年貢を許してくれました。それが刈り取つて家に運んで來ると、後から穗を抽き出してどこの家よりもよく實つたので、此家の暮しはますます豐かになつたといふことです(能登鹿島郡)。

盲の水の神

むかし肥前の深江といふ村に、母とたゞ二人で住んでゐる若い醫者がありました。或日

途中で村の子供が、白い鰻をつかまへて殺さうとしてゐるのを見て、命を助けて放してやつたことがありましたが、やはり矢村の彌助さんのやうに、後に美しい旅の娘になつて來て、此家の嫁になつたさうです。さうして一人の男の子が出來てから、正體を見られて歸つて行つたといふことであります。ある時姑が用があつて嫁の部屋に行つて見ましたところが、大きな蛇が子供を卷いて鼾をかいて寢てゐたので、それからもうゐることが出來なくなつて、ねんごろに子供のことを賴んで歸つて行きました。若しよい乳母がなくて育てにくいやうであつたら、どうか普賢岳の池の岸へ來て、私を喚んで下さいと言ひました。

それから父親の手で子を育てゝ、乳が足りなくて難儀をしました。そこで其子を抱いて山の上の池に尋ねて行きますと、約束の通り其女が出て來て、美しい一つの玉を取り出して子供に嘗めさせました。是は私の眼の玉でありますが、乳の代りに嘗めさせると此子が丈夫に育ちます。大切にして持つてゐて下さいと言つて別れました。ところが其歸り路で見巡りの役人が此醫者の懷中のふくらんでゐるのを怪しんで、世にも珍らしい寶玉を持つ

てゐることを知つて、それを取り上げて殿樣にさし上げてしまひました。子供は乳が出なくなつたので、又泣き立てゝ仕方がありません。そこで翌日はもう一度同じ池の端にやつて來ますと、今度は片目になつて其女が現れて、詳しく其話を聽きました。今一つある玉を遣つてしまふと、私はもう盲になるけれども、我子の爲とあればそんな事はなんでもないと言つて、殘つた片方の眼の玉を子どもの父に渡し、泣く〳〵歸つて行つたさうです。

しかし是ほど迄に親の愛情の籠つた玉でしたが、それを又取られてしまひました。殿樣と役人とはどこ迄も無慈悲であつて、このやうな結構な玉は一對にして將軍家に献上した方がよいと言つて、折角二度目に貰つて來た玉も、又役人に持つて行かれました。普賢岳の大蛇は此事を聞いて、非常に怨み又憤つたさうであります。寛政年間の島原の大地震大津浪は、その盲になつた池の神の腹立ちから起つたと言つてゐる人も澤山あります。さうすると大蛇の母から眼の玉を貰つたのは、今から百四五十年の話といふことになりますが、實際はもつと大昔からの話であつたかと思はれます(肥前南高來郡)。

爺に金

これはうっかりしてゐる所へ金銀が飛んで來て、知らぬうちに大金持ちになつた話であります。むかし〳〵或村に、善い爺と惡い爺とがありました。ある時善い爺は一人で山に入つて爲事をしてゐますと、何處からともなく取っつかうかくっつかうかといふ聲が聞えました。あんまり何度も其聲がするので、爺は何心なく取っつかば取っつけ、くっつかばくっつけと言ひますと、不意に兩方の松林の中から金と銀とが幾らともなく飛んで來て、肩や背なかにうんといふ程乘りました。それを持つて歸つて家の中にひろげて、婆と二人で眺めてゐると、隣りの惡い爺が遣つて來て、それを見て大そう羨しがりました。

おらも其眞似をして寶物を背負つて來ようと、次の日は隣りの爺が同じ山へ入つて行くと、案の條左右の山の中から、くっつかうか取っつかうかといふ聲が聞えて來ました。早

速大喜びでくっつかばくっつけ、取っつかは取っつけと言つて背なかを出すと、今度は松の樹の上から松脂が飛んで來て、重いくらゐ惡爺の肩と背なかに附きました。婆あ婆あ今歸つて來たぞ。早く燈火をつけて來て見せよと言つて、婆は大いそぎて近くまで火を持つて來ましたら、其火が松脂にうつつて、惡い爺は大火傷をしたさうであります。

大歲の焚き火

昔々ある田舍に、貧乏な一人の馬方がありました。明日は元日だといふのに一つも爲事がなくて、空の馬を牽いて家へ歸つて來ようとしますと、街道の松並木の陰に、きたない乞食が倒れて呻つてをりました。やれ〳〵俺よりもまだ氣の毒な人があつたか。これは助けて遣らなければならぬと思つて、幸ひ空っぽの荷鞍の上に載せて戻つて來たさうです。さうして女房と相談をして、土間に莚を敷いて横に寢かせ、何もないけれども地爐の火だ

けはうんと焚いて、どうやらかうやら年だけは取らせました。元日の朝はお天道様の高く上がらつしやる迄も、其乞食は起き出して來ませんから、傍に寄つておい〳〵と、起して見ても返事がない。なんだか冷たくなつてゐるやうだと思つて、びつくりして掛けてやつた藁の莚をめくつて見ると、乞食だと思つたのは大きな黄金の塊りでありました。それを使つて其馬方は、すぐに大金持ちになつたさうです。めでたし〳〵（三河南設樂郡）。

笠地藏

昔々ある村に、至つて心の善い爺と婆とが住んでゐました。爺は毎日編笠をこしらへて、町へ出て賣つて暮しを立てゝをりました。明日は正月といふ日にも笠を賣りに出ましたが、暮の市だから笠などは少しも賣れません。しかたがないので笠を背負つて戻つて來ると、ひどい吹雪の中で野中の地藏樣が、濡れて寒さうに立つてをられます。是は御氣の毒

笠地藏

だと思つて、六つある笠を六つの石地藏樣に著せて上げました。さうして家へ來て婆に其話をして、何もする事がないから其まゝ寢てしまひました。さうすると年越しの夜の明け方に、遠くの方から橇を曳く音がして、歌の聲が聞えて來ました。

六臺の地藏さ
笠取つてかぶせた
爺あ家はどこだ
婆あ家はどこだ

斯ういつて橇を曳く聲が、段々と近くなつて來るので、起き出して、こゝだ〳〵といふと、戸の口へどっさりと、寶物の袋を投げ込んで置いて、六人の地藏樣が歸つて行く後影が見えたさうであります。

團子淨土

昔々ある所に、爺と婆とが又ありました。春の彼岸に彼岸團子をこしらへてゐたところが、一粒の團子が底に落ちて、ころ〳〵と轉がつて行きました。だんご〳〵何處まで轉ぶと、爺がさう言つて追つかけて行くと、地藏さんの穴まで轉ぶと言ひながら、團子はとうとう穴の中に入つてしまひました。爺も其後から穴の中へ入つて行きますと、穴の底は廣くて、そこに地藏さんが立つてをられました。その地藏の前でやっと團子をつかまへて、土の附いてゐる方を自分で食べて、土の附かぬ方を地藏さんに上げました。そのうちに暗くなつたからもう歸らうとすると、地藏さんがおれの膝の上さあがれといふ。勿體なくて上れません。いゝから上れといふから其通りにすると、今度は肩の上さあがれといひます。膝までもやっと上つたのに、とても勿體なくて上れませんと斷りましたが、無理に上れと

いふから肩の上へあがりました。さうすると今度は頭の上さ上れといひます。辭退をしてもなんでも上れといふので、思ひ切つて地藏の頭のうへに上りました。さうすると一本の扇を、地藏さんが貸してくれました。今に爰へ鬼共が來て博奕を始めるから、よい頃に此扇をたゝいて、雞の鳴く眞似をしろと敎へられました。案の如く大勢の鬼が遣つて來て博奕を始めたから、暫くしてから地藏のいふ通りに雞の鳴く眞似をすると、そらもう夜が明けると鬼共は大騷ぎをして、錢や金を澤山に殘して置いたまゝで、皆逃げて行つてしまひました。それで爺は其金や錢を地藏さんに貰つて、喜んで家に歸つて來ました。

うちでは婆が待つてゐて、二人でその錢金をひろげて見て大喜びをしてゐますと、ちょうど隣りの婆が遊びに來てびっくりしました。どうして此家では急に其樣に福しくなつたのかと訊くので、正直な爺は有りの儘の話をしますと、それならおら家の爺も地藏さんの穴へ遣るべちゃと言つて、急いで歸つて二人でわざ〳〵團子をこしらへました。さうして其中の一粒をわざと庭に落しましたが、ちっとも轉ばないので足で蹴るやうにして、無理

やりに穴の中に入れて、自分も其後からのこ〳〵と入つて行きました。地藏さんの前に行つて見ると、團子が土まみれになつて轉がつてゐます。其中のきれいな所だけを自分が食べてから、まはりの土の附いたのを地藏さんに上げました。さうして誰も上れとも言はないのに、獨りで地藏さまの膝から肩、頭のてっぺんまでさっさと上つて、貸すともいはない扇を默つて取つて待ち構へてゐますと、やはり其日も鬼共が集まつて來て、地藏の前で博奕を始めました。それで早速その扇をはた〳〵とたゝいて、雞の鳴く聲を眞似て見ますと、鬼たちはもう夜が明けるのか、早いなぁと言つて慌てました。そのうちに一匹の小鬼が遁げそこねて、圍爐裏の鈎を鼻の穴に引掛けて、大きな聲を出して

やぁれ待ちろや鬼どもら
鈎さ鼻ぁひっかけた

と言つたので、爺は思はず知らずくすくすと笑つてしまひました。そうれ人間の聲がしたと、鬼は方々搜しまはつてとう〳〵地藏さんの頭の上から、隣りの爺を引きずり落して、

ひどい目に遭はせました。鬼が殘して行く金を拾つて來る代りに、やつと命だけを拾つて
ほう〳〵の體で遁げて還りました。だからあんまり人の眞似はするものでないといふ話で
あります(羽前最上郡)。

瘤　二つ

むかし〳〵目の上に大きな瘤のある坊さんがありまして、諸國を修行して或山家の村で
泊めてくれる家がないので、仕方なしに古辻堂に入つて一夜を明かしました。夜もすでに
三更の頃ほひに、多くの人の足音がして、此堂に入つて來る者がありました。よく見ると
それは天狗さんで、こゝに集まつて酒盛りをするのでありました。とても夜どほし隱れて
ゐるわけには行かぬので、怖しかつたけれどもよい時刻を見はからつて、自分も圓座とい
ふ藁の敷き物を尻に當てゝ、飛び出して一しょに踊りました。明け方に天狗は歸らうとし

て、おまへは面白い坊主だから此次もまた來てくれ。しかし約束をしてもうそをつくとい
かぬから、是を質に取つて置くと言つて、目の上の瘤をむしり取つて持つて行きました。
坊さんはうるさいと思ふ瘤を取られて、大喜びで故郷に歸つて來ました。

ところが其近所に又一人、同じところに瘤があつて困つてゐる坊さんがありました。此
評判を聽いて羨しくてたまりません。詳しく其人の話を聞いて置いて、わざ〳〵瘤を取ら
れに其辻堂まで出かけて行きました。案の如く夜ふけに天狗が集まつて酒盛りをしますか
ら、急いで圓座を腰にくゝり付けて踊り出して見ましたところが、天狗たちは大變喜んで、
おゝ坊主、よく約束をまちがへずに又來てくれたな。大きに御苦勞であつた。それでは質
に取つて置いた瘤を返すぞと言つて、何か顏へ打ち付けられたように思ひますと、もう目
の上のたん瘤が二つになつてゐました。さうして餘計な人眞似はしない方がよかつたと、
いつ迄も後悔をしてゐたさうであります。

奥州の灰まき爺

むかし〳〵奥州のある在所に、やつぱり善い爺と惡い爺とが、隣りどうしに住んでゐました。二人の爺は同じ晩に、川の流れに雜魚を捕る簗といふものを掛けて置きました。上の爺が朝早く往つて見ると、自分の簗にはたゞ一匹の小犬が入り、下の爺の下の簗には、澤山の雜魚が入つてゐましたので、其簗の雜魚を皆取つてしまつて、それへ自分の簗に入つてゐた小犬を投げ込んで置いて、知らぬ顏をして歸つて來ました。後から下の爺が川に行つて見ると、自分の簗には可愛らしい犬ころが、入つて鳴いてゐるので、取り上げて家へ抱いて來て育てゝやりました。椀で食はせると椀の大きさだけ、鉢で食はせれば鉢の大きさだけ、毎日々々大きくなつて、少し經つと爺の山へ行くときに、色々の道具を背なかに背負つて供をして行くようになりました。ある日其犬は、山で爺樣に鹿を捕ることを敎

へてくれました。爺が大きな聲で、彼方のしゝも此方さ來うと呼ぶと、方々から鹿が集まつて來るのを、一つ一つ其犬が嚙み殺して、それを背負つて歸つて來ました。爺と婆とがそれを鹿汁に煮て食べてゐると、上の家の婆がやつて來て其話を聽いて、それならば俺たちも鹿汁が食べたいから、犬を貸してくださいと言つて連れて行きました。

次の日上の爺は犬をつれて山へ行きました。犬が付けろとも言はぬにこれを持てあれを載せろと、斧だの鎌だの色々の道具を犬の背に負はせて、やれ急げそれ行けと、追ひ立てて山に入り、自分はしゝといふのを間違へて、彼方の蜂も此方さ來う、此方の蜂も此方さ來うと、大きな聲で呼んだものですから、山中の蜂が皆飛んで來て、上の爺を螫しました。上の爺はそれを悉く犬のせいにして、腹を立てゝ其犬をぶち殺して、こめの木の下にいけて還つて來ました。下の爺はいつ迄を犬を返して來ないので連れに行くと、上の爺はうんうん唸つて寢てゐました。あの犬の御蔭でおれはこんなに蜂に螫れてしまつた。あんまり

憎いから殺してこめの木の下に埋めて來た。犬が欲しくばこめの木の下に行つて見ろと言ひました。

下の爺はそれを聞いて大そう悲しみました。さうして山に行つて其こめの木を伐つて來て、其木で摺り臼を作つて、婆と二人で臼を挽きながら、かういふ歌をうたひました。

ぢんぢ前には金おりろ
ばんば前には米おりろ

さうすると其臼唄と一しょに、爺の前には金が下り、婆の前には米が下りて、暫くの間に長者になつてしまつて、二人は好い著物を著て見たり、米の飯を食べたりしてゐました。そこに上の家の婆が又やつて來て、何處からそんな好い物ばかり、出して來たのかと尋ねました。なにさ是はお前の所の爺樣が、犬を殺してはふり込んだ山から、こめの木を伐つて來て臼にてし挽いたら、金だの米だのが出たものだから、かうして居申すと答へました。それならば其臼を貸してくれと、慾の深い上の婆は又摺り臼を借りて行きました。さうし

て爺と二人で一しょう懸命に、其臼を挽きましたけれども、肝腎の歌の文句は忘れてしまつて、

ぢんぢ前にはばゞ下りろ
ばんば前にはしし下りろ

と歌ひましたので、其唄の通りに臭いきたない物が、幾らでも家の中に流れて來ました。爺と婆とはそれを摺り臼のせいにして、ひどく腹を立てゝ斧で切り割つて、其臼を火にくべて燒いてしまひました。

下の爺は又暫くしてから其臼を取りに來ました。あの臼は飛んでもない臼であつた。家の中をきたない物だらけにして始末にをへぬから、切り割つて竈の口にくべてしまつたぞと、上の爺が言ひました。それならば仕方がないから、其灰でも貰つて行かうと、笊を持つて來て其灰を入れて歸りました。さうして灰の笊を畑へ持つて行つて、畑の脇の沼に下りてゐる雁の鳥を目がけて、かう言ひながら其灰を播きました。

雁の眼さあくはいれ
雁の眼さあくはいれ

さうすると其文句の通りに、雁は目の中に灰が入つて、ころ〳〵と死んでしまひます。それを拾つて還つて又婆と二人で、仲よく雁汁をこしらへて食べてゐますと、又々上の婆が來てどうしてそんなうまい物を、食べてゐるのかと聞きました。お前たちは俺の所の臼を切り割つて燃してしまつたから、其灰を持つて來て、播いて見たら澤山の雁が落ちた。それを拾つて來て斯うして雁汁にして食べてゐるといひました。

それならば少しばかり其灰を分けてくれと言つて、又上の婆が爺に眞似をさせました。上の爺は婆に教へられて、向ひ風の強い晩に屋の棟に上つて、空に向いて灰を播きましたが、やはり大切な文句を忘れてしまつて、

ぢんぢ眼さあくはいれ
ぢんぢ眼さあくはいれ

と大きな聲でどなつたものですから、灰は文句の通りに爺の目の中に入つて、爺は盲になつて屋の棟からころ〳〵と落ちて來ました。雁の落ちて來るのを今か今かと、待ち構へてゐた上の婆は、それを雁だと思つて大きな槌で、打つたといふ話であります（陸中江刺郡）。

海の水はなぜ鹹い

昔の昔の大昔、ある所に兄と弟とが住んでをりました。兄は金持ちで弟は貧乏、年の暮れになつても明日の正月の支度も出來ないので、兄の家へ米を一升借りに行きましたが、ひどいことを言つて貸してくれませんでした。仕方がないから家へ歸つて來ようとしますと、山路で一人の眞白な髯の爺樣が、柴を刈つてゐるのに出逢ひました。何處へお前は行くのかと尋ねますから、今晩は年越しだけれども、御歳神樣に上げる米もないので、當てもなくたゞ斯うしてあるいてゐるばかりだと申しました。それは定めし困ることであら

う。それでは是を遣らうと言つて、小さな麥饅頭を出してくれました。この饅頭を持つて彼處の森の神樣の御堂へ行つて見ろ。御堂の後には穴があつて、そこに大勢の小人がゐてきつとお前の饅頭を欲しがるだらう。金でもなく他の物でもなく、石の挽き臼とならば取り換へてやらうと言つて、其臼を貰つて行くがいゝと敎へてくれました。

敎へられた森の御堂まで行つて見ると、成程穴があつて多くの小人が出たり入つたりしてがや〳〵と騷いでゐます。何をしてゐるのかと思ふと、たつた一本の萱に取り付いて、倒れたり轉んだりしてゐるのでありました。どれ俺が持つて行つてやるべと言つて、指につまんで、運んでやりました。さうすると穴の口で、人殺し人殺しと蚊の鳴くやうな聲がするので、驚いて氣を付けて見ると、小人が一人下駄の齒の間に挾さまつてゐましたので、急いで丁寧につまんで出してやりました。なんたら力の强い大きな人だと言つて見上げた拍子に、弟の手に持つてゐる麥饅頭を見つけました。それを是非私達に讓つてくれと澤山の黃金を持つて來て前に積みましたが、兼て白髮の爺樣に聞いてゐますから、石の挽

き臼とならば取り換へてもいゝと言つて、とう〳〵其臼を貰つてしまひました。是は小人の中でも二つとない寶物なのだが、饅頭の代りにお前に遣る。右へ廻すと欲しい物がなんでも出る。左へ廻すと出なくなると敎へてくれました。それを大事にかゝへて家に歸つて見ると、女房が待ちくたびれてゐました。年越しの晩だといふに何處をあるいてゐた。米は借りて來たかとやかましく聞きますので、まあなんでもいゝから早く蓆を敷けと言つて、女房に蓆をしかせて其上に小臼を置き、米出ろ米出ろと言つて右へ廻すと、米がぞく〳〵と一斗も二斗も出て來ました。此次は鮭の魚が出ろといふと、大きな鹽引きが二本も三本もひよこ〳〵と出た。それから順々に入用の物を皆挽き出して、其晩はなんともかとも言ひようのない、目出たいお年取りをして寢ました。明くれば正月元日の朝で、俺はこんなに俄長者になつたのだから、今までのやうに人の片屋の借り住居などをしてゐるのは面白くない。先づ新しい家を建てようと言つて、挽き臼をまはして立派な家と、五間に三間の土藏を出しました。それから長屋だの厩だの、厩に繫いで置く馬を七匹も出して、あとは

それ餅出ろ酒出ろと言つて、あたり近所や親類縁者を殘らず呼んで、祝ひ事をする支度をしました。村の人たちはびつくりして呼ばれて來て、今までないような御馳走になりました。昨日一升の米を貸さなかつた兄も呼ばれて來ました。どうして又一晩のうちに、こんな長者になつたものであらうかと、不思議で不思議でたまらないので、驚きながらもそちこち氣を付けてをりますと、やがて客人が歸つて行く時に、御土產の菓子でも持たせてやらうと思つて、そつと陰に入つて弟が例の石臼をまはして、菓子出ろ菓子出ろと言つてをるのを隙見をして、はゝあ今分かつた。あの臼だなと感づいてしまひました。

それから其晩客が皆歸つて、弟夫婦がよく寢てしまつた時刻を見はからつて、兄はそつと入つて來て陰の部屋から、石の挽き臼を盜み出しました。さうして其序に傍にあつた餅だの菓子だのも取つて、濱に出て見ると幸ひに小舟がある。是にその寶の臼を載せて、綱を解いて沖の方へ漕ぎ出し、何處かの島へ渡つて一人で長者にならうとしました。併し其舟の中には餅や菓子のやうな甘い物は積んで出ましたが、あいにくと鹽氣の物が何もありま

せん。それでは何よりも先に鹽を出さうと、やたらに臼をまはして鹽出ろ鹽出ろといひますと、さあ出たは〳〵、忽ちのうちに舟に一ぱいの鹽が出た。もうこのくらゐで止めたいとは思ひましたが、左へ廻して止めることを知らぬものですから、いつ迄もいつ迄も鹽ばかり出て來て、とう〳〵其鹽の重さで舟も兄も、盜んで來た石の小臼も、共々に海に沈んで今に誰一人として左に廻す者がない爲に、海の底で其臼が、鹽ばかり出して廻つてをります。それであの通り海の水は、鹽からいのだといふことであります(陸中上閉伊郡)。

八石山

昔々、越後國のある百姓の家に、兄と弟と二人の子がありました。兄の母は亡くなつた母、弟の母は今の母でありました。繼母は兄を憎んで、どうかして自分の生んだ弟の方だけに、よい暮しをさしてやりたいと思つてゐました。それで一枚の山畑を二つにしきつて、

二人の兄弟に大豆を蒔かせて、どっちの畠の大豆がよく出來るか比べて見ようと言つて置いて、夜中にそっと兄の畠に行つて今日蒔いた豆を悉くほぢくり出してしまひました。

それだから兄の畠の方には、いつ迄經つても豆は生えて來ません。あの子は豆を蒔くのをいやがつて、何處かへ持つて行つて棄てたのにちがひないと、父親に言ひつけて散々に小言を言はせようと思つて、待ち構へてゐたのであります。ところが亡くなつた兄の母が見えない所にゐて、助けたものでありましたらうか。たつた一粒だけ其畠の隅に、繼母が見落して拔き出して來なかつた豆粒がありました。それが芽を出してずんぐ〜大きくなつて、後には山よりも高い大木になつて、其枝のさきが天まで屆いてしまひました。さうして秋になると其一本の木から、大豆が八石取れて繼母の惡巧みは、すっかり當てがはづれてしまつたさうであります。それから其村の高い山の名を、八石山といふことになりました。北條の專福寺といふ御寺の門柱は、其大豆の樹を伐つて來て、それを材木にして建てたといふさうであります（越後刈羽郡）。

犬頭絲

昔々三河國に、二人の女が隣りどうしに住んで、毎年蠶を飼つて絲を取つて暮しを立てゐました。ところが一方の女の飼ふ蠶は、いつもよく出來て澤山の絲が取れるのに、もう一人の女の家では、どうも思ふやうに育たなくて、段々に貧乏になりました。下女や下男もいやになつて、追々に遁げて歸つてしまひました。最初に澤山に飼つてゐた蠶が、一つづゝ死んで行つて、いつの間にかたつた一匹になつてゐました。ところがその一匹の蠶がよく桑を食つて、毎日々々大きくなつて來ますので、一匹ばかりでは仕樣がないと思ひましたけれども、それを大切に育てゝをりましたら、後には珍らしく大きな蠶になりました。或日其一匹の大蠶を表に出して、桑を遣らうとしてをりますと、家に飼つてゐた白犬が來て尾を振つて前に見てゐたのが、うっかりしてゐるうちに其蠶を取つて食べてしまひ

ました。折角これまで一しょう懸命に大きくした、たった一匹の殘りの蠶まで、犬に食べられてしまふといふは、よく〳〵運の惡いことだと悲しみましたが、犬のしたことだからなんともいたし方がありません。犬は平氣な顏をしてそこに寢ころんでゐます。女はそれを見て、情ないと思つて一人で泣いてゐました。そのうちに犬がくしゃみをしたので氣を付けて見ますと、其鼻の穴から白い絲が、双方一筋づつ一寸ばかりも垂れてゐるのが、まるで絹絲の通りでありました。あまり不思議なので、絲の端を持つて引いて見ますと、二筋ともどこまでも長く續いてゐます。そこで試みに、わくに掛けて繰つて見たところが、二百三百のわくを卷いても、まだ其絲が切れません。大よそ四五貫目も絲が出たかと思ふ頃に、其白犬は倒れて死んでしまひました。これは神樣の御使ひだったかも知れぬと思つて、犬を裏の畠の桑の木の下に埋めてやりました。其頃ちょうど京都には御大禮があつて、天子樣の御服を織る絹絲を、土地の役人が尋ね求めてをりましたが、今一人の女の家では、養蠶は當つたけれども絲が黑くて、節が多くつて御用になりません。ところが此方の絲を

庭にかけて灑してゐるのを見ると、眞白で光が美しくて誠に結構な品であつたので、早速それを御用に立てました。白犬を埋めた裏の桑の木には、其翌年から蠶が自然に生れて繭を作り、是も同じやうな好い絲になりました。三河の絹絲がそれから後、いつ迄も他の諸國よりも優れてゐたのは、全くこの犬頭蠶の種であつたからだといふ話であります。

狐の恩返し

とんと昔、爺樣が朝起きて內庭を掃いてゐますと、豆が一粒庭の隅に轉がつてゐました。是は勿體ないと裏の畠に持つて行つて蒔いて置いたところが、やがて芽を出してぐんぐんと大木になり、これは八石まではありませんでしたが、一本の豆の木に豆が一斗も二斗も實つてゐたさうです。

ところが或日一匹の狐がやつて來まして、一度に其豆をぺろりと食べてしまひました。

老人は眞赤になつて怒つて、折角おれが丹誠をして作つた大豆を、盜んで食つてしまふとは憎い獸だ。ぶち殺してくれると言つてどなりますと、狐は大きにあやまつてどうか宥して下さい。其代りにはお前樣に金儲けをさせて上げますといふから、それならばと言つてこらへて遣りますと、直ぐに一頭の良い駒に化けました。爺はそれを長者の家へ牽いて行つて、高い値に賣つてお金を儲けました。

それから四五日もすると、馬に化けてゐた狐はもう遁げて還つて來ました。今度は一つ茶釜に化けて上げましようと言つて、誠によい頃合の茶釜になりました。爺はそれを又御寺に持つて行つて、御茶の好きな和尙に賣りつけました。和尙が其茶釜を爐にかけると、きいんきいんと鳴ります。小僧が川に行つて其茶釜を磨ぎましたら、痛い痛い、小僧さつと磨げと言ひます。これは大變茶釜が物を言ひました。なんのそんな事があるものかと、和尙がうんと火を焚いて其茶釜をかけますと、狐はとう〳〵我慢がしきれなくなつて、熱いぞ和尙がげえと言つて、尻尾を出して遁げて行つたといふ話(津輕五所川原)。

聽耳頭巾

これも昔奥州の方の或在所に、又一人貧乏な善い爺がありました。氏神の稻荷樣にいつも生魚でも上げたいと思つたけれども、それも貧乏で思ふやうにはならぬので、或日御社に參つて斯う言ひました。氏神樣申し、氏神樣申し。おれはとても貧乏で生魚も上げることが出來ませんから、どうぞこの俺を食つてくなさい。どうぞ御願ひでござりますと言つて拜みました。氏神樣は爺や爺や、何もそんなに心配をすることはいらぬ。俺もお前の難儀してゐることはよく知つてゐる。それでは一つ運を授けて遣んべ。それ此寶頭巾を遣るから被つて見ろ。これを被ると鳥でも獸でも、なんでも言ふことが直ぐ解るからと言つて、古しい赤の頭巾を一つ、その爺に授けました。さうでがんすか。これは早どうも有り難うがんすと、喜んで早速そのきたない赤頭巾を懷に入れて出て來ました。さうしてゆ

らり〳〵と街道をあるいて行きますと、路傍に大きな樹がありました。其樹の下に休んでゐましたら、いつの間にかついとろとろと睡つてゐました。

さうすると濱の方から、一羽の烏が飛んで來て、疲れて其木の枝に休みました。すると又國中の方からも、一羽の烏が飛んで來て、同じ樹の上にとまりました。爺はこれを見て、稻荷樣に貰つた聽き耳頭巾を、試して見るなら今だと思つて、そつと出して被りますと、俄に頭の上で話の聲がし始めました。濱から來た烏が、やあ暫くであつた。おれは今まで濱の方にゐたが、濱も此頃漁がなくつて、不景氣で困るから飛んで來た。お前は又どつちから來たといふと、おれはあらみの方から遣つて來たが、いや不景氣は何處に行つても同じだ。時に何か世の中に不思議なことはないかねと聞きますと、濱の烏は、別に珍らしいことでもないが、濱のある村の長者どんでは、土藏を建てゝからもう五六年にもなるが、土藏の入り口の屋根を葺く時に、どうして匍ひ上つたものか一匹の蛇が上つてゐて、ちようど板の下で釘を打ち付けられて、今に動けないで半死半生になつてゐる。感心

なことには雌蛇が食ひ物を運んで養ひ續けてゐるが、ほんとうに御互ひに苦勞をしてゐる。其思ひが積り積つて、長者どんの娘の體に障つて永煩ひをしてゐる。あれは今のうちに土藏の屋根の板を離して蛇を助けてやらぬと、蛇も死ぬし娘も死んでしまふ。おれも再々あの屋根に飛んで行つて鳴いて遣つたけれども、人間といふ者はなさけない者で、少しもそれを覺らないと言ひました。相手の烏もほんとうに人間はさういふ事になると、まるで何もわからぬものだと言ひ合つて、そんだらば又此次に出逢ふべなと、西と東とに烏たちは別れて飛んで行つたさうです。

爺はこれはよい事を聽いた。早く其長者どんに行つて娘を助け、又蛇の命も助けてやりたいが、なんにも支度がなくてこれでは出かけられないと、町裏をうろ〳〵とあるいてゐますうちに、こわれた木鉢が落ちてゐたから、それを拾つて紙を貼つて頭にかぶり、濱の長者どんの門前に行つて、八卦八卦と大きな聲で呼はつて通りました。長者の家では娘の永煩ひを治すのに、何がよからうかと心配してゐた時だから、あい〳〵門前をふれて通る

八卦屋、早く内さ上つて八卦置いてくれと言ひました。爺様は内に入つて何八卦を置きますべと言ふと、實は此家の娘が永の病氣で、今日か明日かといふ容態だから、なんとすれば良くなるか、其八卦を置いて見てくれと言ひました。それでは病んでござる娘御の所に通してくれと言つて、娘の枕もとに行つて坐つて、二十里這うたる葛の葉は這へば二十里といふ唱へごとを何度もくり返してから、前に烏からちょうど聽いて置いた話を、委しくして聽かせました。さうすると長者どんでは、如何にも八卦様の言ふ通り、五六年前に土藏を建てたことがある。それではそんな事もあつたかと、近所の大工を喚んで來て、早速土藏の屋根板を離させて見ますと、果して一匹の蛇が體が白くなつて、もう半分腐りかけて釘に打ち付けられてゐた。あゝ是のことだと大事に笊に入れて屋根から下し、流し前に置いて物を遣つて、暫く介抱して丈夫にしてから放してやりました。さうすると薄紙を剝ぐやうに、娘の病氣も一日一日とよくなつて、日數の經つうちにすっかり治つてしまひました。長者どんでは大喜びて御禮金は三百兩、爺は忽ち大金持ちになりました。さうし

て家に還つて急に氏神様の御宮を建て直し、今までないやうな立派な御祭りをしました。もちろん生魚も度々買つて來て供へました。

それから聽耳爺は、今度は好い著物を著て又旅に出ました。さうしていつかの大木の下で休んでゐると、また西東から烏が飛んで來て、其木の枝に休んで世間話を始めました。一羽の烏が一つ町にばかりゐてはつまらぬと言ふと、もう一羽の烏が本にさうだが、おれの今までゐた町には斯ういふ事がある。町の長者どんでは旦那が大病で、今日か明日かといふ命だが、それは五六年前に離れ座敷を建てたとき、昔からあつた庭の楠の木を伐り倒して、其切り株がちょうど離れの軒下になつて、雨垂れに打たれてゐる。それでも根が死に切らないものだから、生のある限りは芽が出て、育ちたいと精魂を盡すのだが、芽が出れば刈り芽が出れば刈り取られて死ぬには死なれず、そんならばと言つて生きるには生きられず、其思ひが旦那にかゝつて病氣になつてゐる。それに又山々の友だちの木が、毎夜のやうに見舞ひに來るが、是も亦大へんなことだ。あれは生かさば生かすべし、又どうせ

枯らす氣なら、根からよく掘つてしまへばよいに、困つたものだと話しました。爺は烏の話を聽いて早速其町に出かけました。八卦々々、賴むから內の旦那の病が、どうすれば直るものか見てくれと見ふので、長者どんの家へ喚び込まれました。爰には五六年前に建てた離れ座敷がある筈だから今晩はおれを其座敷に泊めてくれ。あや八卦殿はどうして其離れのあることを知つてゐるかと家の者がびっくりします。それも八卦で中てたが、先づ今夜は俺をそこに置いてくれろ。明日は旦那の病氣の元を、洗ひざらひ當てゝ見せるから、俺が言ふまでは誰も入つて來るなと言つて、其晩は一人で起きて樣子を見てゐました。

さうすると眞夜中頃になると、がさり〳〵と近よつて來る者の足音がして、楠の木よ、あんばいはどうだと言ひます。それに返事をするのはなんだか土の底からでも出るやうな幽かな聲で、あゝさう言つてくれるのは六角牛山の梛の木か。遠い所を毎度難儀をかけて濟まない。おれは此通り一刻も早く死にたいのだが、それさへ思ふやうに行かないので苦しんでゐると言ふと、なにそんなに力を落すものでないと、慰めて歸つて行きます。又一

時經つと、今度はしゅっしゅっといふ音がして來る者がある。楠の木どん、あんばいはどうかなと聲をかけますと、又楠の木が以前のやうな聲で、さういふお前は早地峯山の這ひ松だか。おれはとても助からぬが、かうお前たちに毎夜見舞ひに來て貰つては申しわけがないと言ひます。あゝさうだか。なんでもないことだから心配するな。今夜はつい五葉山の方へ遊びに行く通り筋だから、かうやつてお前にも逢へたが、これが東と北とでは逢ふこともむつかしい。そんなら春にもなつて見たら又本復するだらうから、力を落さずに時節を待つがよいと言つて、這ひ松も亦さっきのように音をさせて歸つて行きました。爺は聽耳頭巾を被つてゐて、すっかり此話を聽いてしまつて、朝になると病人の枕元に案內して貰つて、いつもの通りの葛の葉は二十里の呪文を唱へてから、昨晩の樹木の問答を詳しくして聽かせました。是は軒下の楠の木だけの難儀ではない。諸處方々の高山の木までが、この爲にえらい苦勞をしてゐるのだから、早く其根株を掘つてしまへと敎へました。さうして根を堀つて庭に木の神樣に祭つたら、旦那殿の病氣も、また薄紙を剝ぐやうに日

ましによくなつた。長者の家の者は皆大喜びで、其御禮が又三百兩。それを貰つて家に還つて來てからは、爺はもう慾を出さないて八卦を止め、自分も普通の長者になつて暮したさうであります(陸中上閉伊郡)。

雀の宮

昔々野州の或田舍に、饅頭をまる呑みにして食べるのを、自慢にしてゐる妙な人がありました。惡い者がよく其癖を知つてをりまして、針を饅頭の中にそつと入れて置いたのを、知らずに例の通りまる呑みにしたものですから、腹が痛んで苦しんで寢てしまひました。さうして寢ながら障子を開けて外を見てゐますと、雀が一羽、裏の韮畠に來て、頻に韮の葉を食べてゐました。どういふわけだらうと思つて毎日氣を付けてゐたところが、其うちに雀のお尻から、韮の葉にくるまつて小さな針の折れが落ちたそうです。是は韮の葉

を食べれば針が出ることを、神樣が雀に敎へさせて下さつたのではないかと思つて、試みに自分も韮を澤山食べて見ますと、果して針が出てしまつて、痛みがすつかりなくなりました。それで喜んで御社を建てたのが雀の宮で、今でもあの邊の停車場の名になつて殘つてゐます。

黑鯛大明神

むかし土佐國のある山奥の村へ、濱から一人の魚商人が、魚を賣りに入つて行きました。寂しい山路で、路の脇の林の中に、誰かゞ罠をかけて置いて、それに山鳥が一羽かゝつてをるのを見ました。魚賣りは之を見て欲しいと思ひましたが、只取つて行くのはよくない事であるし、そこにちようど人がゐないので、代りに自分の籠の黑鯛を三尾挾んで置いて、默つて其山鳥を取つて歸つて來ました。其後から村の人が來て見て、山に黑鯛のゐるのが

既に不思議であるのに、それが山鳥の罠にかゝるといふのは只事ではよもあるまい。なんでも是は天の神の御示しであらうと、一同評議をして直ぐに小さな社を建てゝ、其三尾の黒鯛を齋ひ込めて、黒鯛三所權現と唱へて祭りました。其評判が傳はりますと、方々から御參りに來る者があつて、社は大へんに繁昌しました。後に魚賣りが又遣つて來て、山鳥を持つて行つた話をする迄には、もう繁昌の御宮になつてゐたさうであります。

蜥蜴の目貫

昔ある一人のすぐれた彫物師が、まだ一向世の中にも名を知られずに、貧乏で暮してゐた頃の話ださうであります。或日庭に下りて一匹の蜥蜴の、石の間に遊んでゐるのを見付けました。其蜥蜴の形が如何にも美しいので、いつ迄もぢっと見てゐるうちに、ふと是を彫刻して見ようといふ氣になつて、其形を寫し取つて、程なく一つの銀の目貫を作り上げ

ました。我ながら好く出來たと思つて、それを道具屋に持つて行きますと、直ぐに買ひ取つてくれたばかりでなく、後から又一つ又一つと、次ぎ〳〵の注文がありました。いづれも上作と賞められて、それが評判になりまして、幾つ拵へても賣れぬといふことはなく、次第に收入も多くなつて、豐かな暮しが出來るようになりました。たゞ奇妙なことには、此目貫を作り出すやうになつてから、何時庭前へ出て見ても、夏でも冬でも石の間から、必ず同じ蜥蜴が出てゐて、目の前で遊んでゐるのださうです。始めのうちは別になんとも思ひませんでしたが、段々に後にはそれが氣になつて、なんだか氣味の惡いやうにも感じられて來ました。それも他人の目には少しも見えず、只自分だけに見えるので、いよいよ我慢が出來なくなつて、或時思ひ切つて小石を打ち付けて、其蜥蜴を殺してしまひました。さうしたところが其時から、評判の細工が急に下手になつて、たま〳〵作つても誰も買はうといふ人がなく、蜥蜴の目貫の注文はさっぱり絶えてしまつて、いつの間にか又元の通りの、貧乏な彫物師になつてしまつたそうであります。

長崎の魚石

昔支那の人をまだ唐人と謂つてゐました頃に、長崎の伊勢屋といふ家で、懇意にしてゐる唐人が一人ありました。それがもう國へ還るといふ前に、此家へ一度遊びに來まして、土蔵の石垣に積んであつた小さな一つの青石を、立つたり腰かけたりしていつ迄も眺めてをりましたが、あの石を是非私に譲つて下さいと、熱心に主人に所望しました。私の方では不用のものだから譲ることはなんでもないが、この石一つ拔けば石垣が崩れるかも知れず、後の造作が甚だ面倒だから、此次渡つて來られる時までに、普請の序があらうから、必ずのけて置いて進上いたしましようと答へますと、石垣を積みなほすのに金がかゝるならば、此石の代として百兩の金を出します。私は今度又來るかどうかも知れないから、是非とも今買ひ受けて還りたいと唐人が言ひました。伊勢屋の主人久左衞門は百兩の聲

長崎の魚石

を聞いて、始めて此石の貴いものだといふことに心づき、少しばかり慾心を起して、却つて即座に手放すことを惜み、なんだのかだのと斷りの口上を設けて、しまひには三百兩まで出さうと唐人が言ふのに、どうしても賣ることを承知しませんでした。それから愈唐人の船が出てしまつてから、わざ〳〵其青石を掘り出して見ました。さうして玉磨きの職人を呼んで鑑定をさせましたが、いかさま普通の石ではないやうだといふばかりで、少しづつ磨かせて見ても光も出ず、別に是ぞといふ變つたこともありません。あまり不思議なので鑿を入れさせて見たところが、ちょうど眞中から二つに割れて中から水が出て來て其水と共に、金魚のやうな赤い小鮒が、飛び出して直ぐに死んでしまひました。是は誠に惜しいことをした。三百兩の金を取り損なつたと言つてをりますと、次の年にはその同じ唐人が、今度は千兩の金を持つて、青石を買ひに又遣つて來ました。伊勢屋は殘念でたまりませんから、詳しく樣子を話しますと、唐人も涙を流して悲しみました。あの石は私たちも名を聞いてゐるだけで、他ではまだ一度も出くはしたこともない、魚石といふ此世の寶

であつた。あれを氣永に周りから磨り上げて、水から一分といふところ迄で留めると、水の光が中から透きとほつて、二つの金魚の其間に遊びまはる姿は、又と此世にもない美しさであつて、それを朝夕に見てゐると自然に心を養ひ、命を延べる德があると傳へられ、王侯貴人は如何なる價を拂つても、手に入れたいと望んでゐる品であつた。私はそれを本國に持ち還つて買ひ主を見つけ、妻子眷屬と共に一生を安らかに送らうと思つてゐたのに、今や其願ひ事も空しくなつた。かういふ天下の奇玉の世に隱れ、又永く傳はらないのも天命であつたかも知れない。私は最初から此話をして置けばよかつたのに、默つて買ひ取らうとしたのが惡かつた。今度こそは千兩が其三倍になつても、是非とも買ふ積りで此通り用意をして來ましたと言つて、三千兩の金包みを出して見せました。さうしてすぐごと支那へ還つてしまつたさうであります。遠い國の商人は思ふことを顏に出さず、又どんな場合にでも直段の掛け引きをする癖があり、日本の商人は物を知らずに、只慾ばかり深かつた爲に、昔は折り〳〵こんな飛んでもない損をしたのださうであります。